

一、遺跡の位置と環境

神園山瓦窯址は標高183.0mを測る神園山の南麓に立地している(第1図1)。神園山は近隣の小山山(標高186.6m)・戸島山(標高133.0m)と共に“託麻3山”と称されている独立丘であり、これらの山々の西側には託麻原台地が広がっている。この託麻原台地は阿蘇外輪山の一つ俵山から連なる高遊原高原を東境として西へ緩やかに傾斜している。台地北側は、蛇行を繰り返す両側に河岸段丘を形成しながら西流する白川によって区切られており、台地南縁に沿っては加勢川の支流が流れている。託麻原台地上から白川両岸にかけての一带は縄文時代以降歴史時代に及ぶ遺跡の密集地である⁽¹⁾。神園山・小山山を中心とする地域に限定して関連する時期の遺跡を挙げると、瓦窯址としては小山榎谷寺瓦窯址⁽²⁾(同2)、中山窯跡⁽³⁾(同3)がある。このうち榎谷寺瓦窯址については神園山瓦窯址と同じく1966年12月に日本考古学協会によって発掘調査が行われ、8世紀中頃と推定されるロストル式平窯であることが判明している。また中山窯跡からは熊本市渡鹿一帯で出土する瓦と同一のものが出土しており、渡鹿廃寺との関わりが指摘されている。また一方では縄文時代～歴史時代に至る遺物が出土した神園遺跡⁽⁴⁾(同6)、弥生時代後期～歴史時代に及ぶ集落の調査がなされた山尻遺跡⁽⁵⁾(同9)などの集落址の存在も知られている。さらに縄文時代～歴史時代にかけての遺溝・遺物が検出された長嶺遺跡群⁽⁶⁾(同14)での多数の平瓦・丸瓦の出土は注目される。

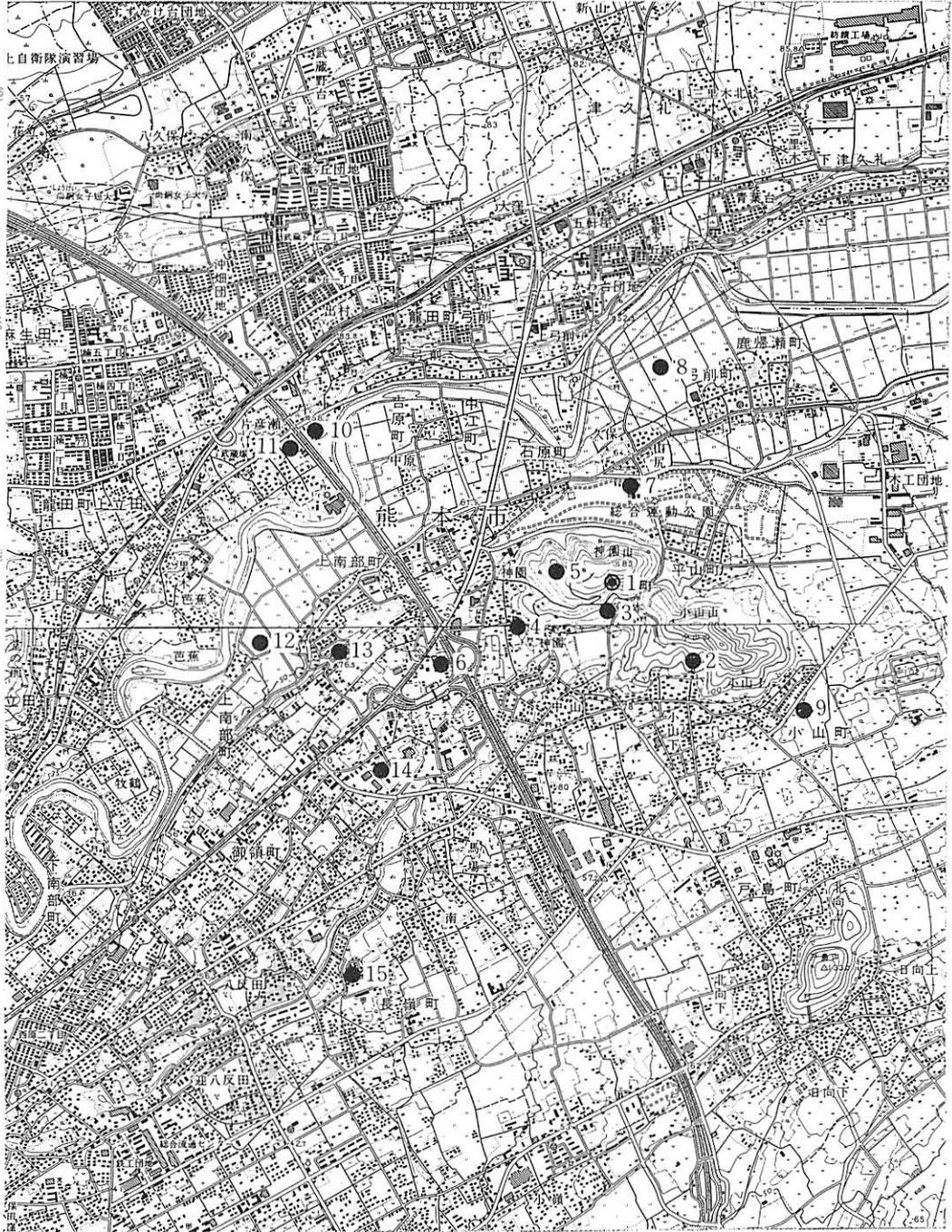
さて神園山瓦窯址が所在する神園山の南麓にはほぼ南北方谷に谷が延びており、現在は流量の少なくなった小川が流れている。小川の下流一帯は近年まで水田として利用されていたことが知られ、現在は低湿地となっている。瓦窯址は小川の西斜面に現在2基が確認されるのみであるが(第2図)、この2基より上流部にも瓦の散布が認められるため、本来はさらに多くの瓦窯址が存在していたものと思われる。しかし瓦窯址の上方の登山道建設の際にかなり大量の土砂が谷に流れ込んでおり、本来の基数は不明である⁽⁷⁾。

註(1) 熊本市教育委員会「熊本市内遺跡地図」1980年

熊本市教育委員会「熊本市東部地区文化財調査報告書」1971年

註(2) 三島 格「榎谷寺・神園山瓦窯址」『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1971年

註(3) 上野辰男「中山窯跡」『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1971年



第1図 神園山瓦窯地周辺歴史時代遺跡分布図

- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| 1. 神園山瓦窯址 | 6. 神園遺跡 | 11. 弓削平下B遺跡 |
| 2. 小山榎谷寺瓦窯址 | 7. 山尻遺跡 | 12. 上南部遺跡 |
| 3. 中山窯跡 | 8. 託麻・弓削遺跡群 | 13. 供合松ノ上遺跡 |
| 4. 神園田淵屋敷遺跡 | 9. 小山上遺跡 | 14. 長嶺遺跡 |
| 5. 神園山西麓遺跡 | 10. 弓削平下A遺跡 | 15. 八反田遺跡 |

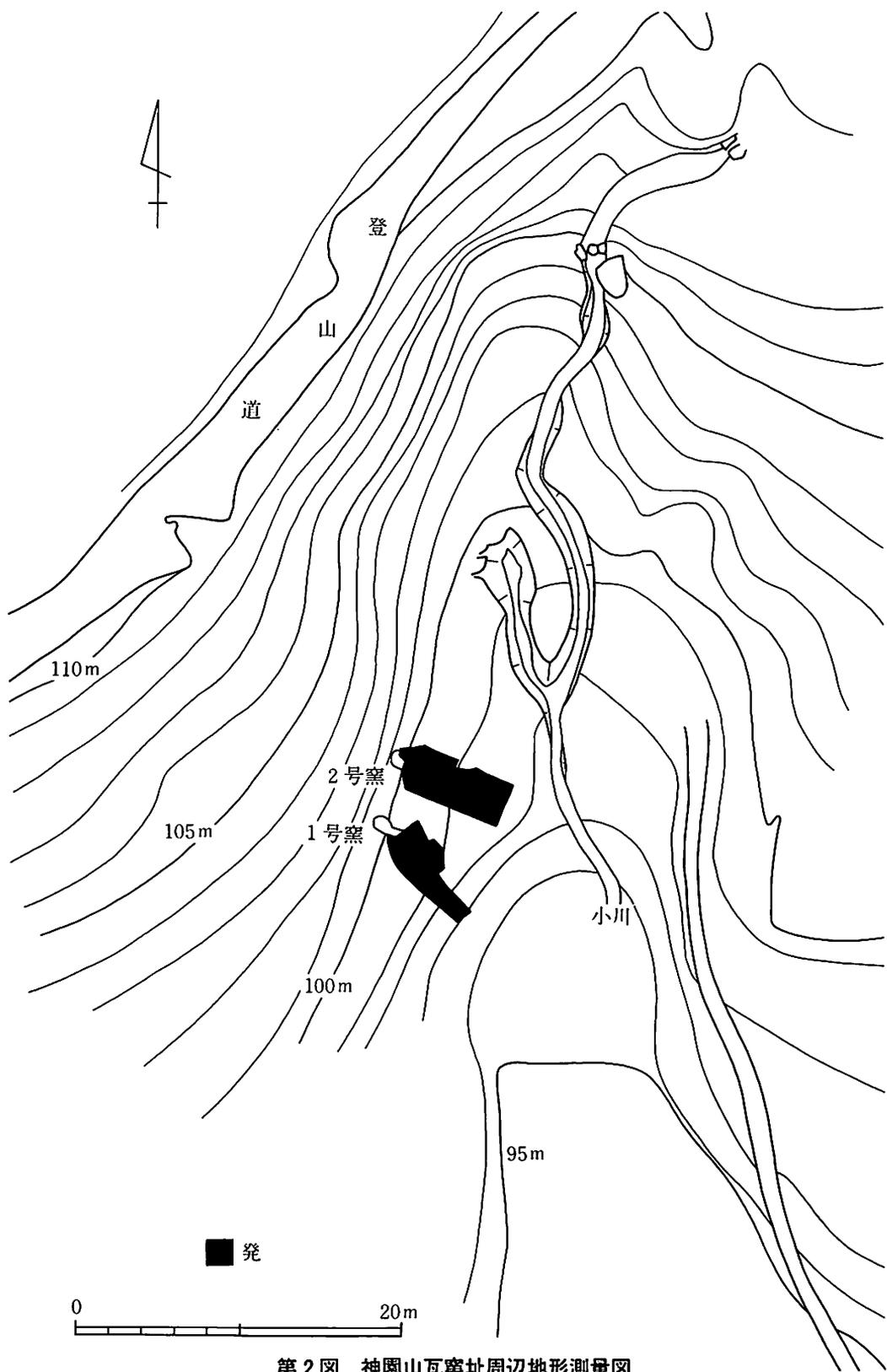
- 註(4) 東 光彦・緒方タカ子・佐藤伸二「神園遺跡」『熊本市東部地区文化財調査報告書』1971年
- 註(5) 上野辰男「山尻弥生遺跡」『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会1971年
大城康雄・柿内順也「長嶺遺跡発掘調査報告書（熊本市託麻市民センター建設に伴う文化財調査）」熊本市教育委員会 1971年
- 註(6) 同上
- 註(7) 調査後1年を経た1991年4月、調査地より北東へ50m程離れた地点に、土取り作業によって露呈した窯跡が発見された。発見時既に原型を留めぬほど破壊されており、窯の床面をわずかに残すのみである。

二、調査の目的と経過

神園山瓦窯址は1966年に日本考古学協会生産技術特別委員会窯業部会によって小山椋谷寺瓦窯址とともに、2基の窯跡のうち1基について発掘調査が行われた。この調査の概要については「三、調査の概要」の項で説明する。神園山瓦窯址はその周辺から肥後国分僧寺跡で出土するものと同類の瓦が採集されており、肥後国分僧寺に瓦を供給したことが知られる数少ない窯跡である。この事実の確認を目的として調査が行われたのであるが、出土遺物は現在所在不明となっている。そのため神園山瓦窯址資料としては採集品しか存在せず、遺跡の内容については不明確な点が多い。そこで今回『新熊本市史』編纂事業の一環として神園山瓦窯址の学術調査を行うこととなった。

調査はまず瓦窯址周辺の地形測量を行い、その後発掘調査を行った。前回調査が行われた南側の窯跡を1号窯、1号窯から約4m北側に所在する窯跡を2号窯と名付けた。1号窯については窯体の調査は既に行われていること、また2号窯は窯体天井部が崩壊する危険性が高いことから、共に灰原の調査のみを行うこととした。まず窯跡周辺の伐採を行い、次に1号窯・2号窯それぞれの開口部前面に窯体の長軸に沿って主軸を設定し、1号窯側は南東に6m×4m、2号窯側は南東に7m×5mの発掘区の設定を行った。さらに窯体の保全及び樹木との関係を考慮してやや変則的ではあるが、1号窯は1区2m×2m、2号窯は1区2.5m×1.5mに細分し、それぞれ掘り下げていった。最終的には1・2号窯の層序の対応関係を把握するため、1・2号窯間に確認のためのトレンチを入れる予定であったが、調査期間及び作業人員の都合上断念した。そのため2基の窯について別々の層序名を用いてある。

なお本調査で撮影したキャビネフィルムを業者委託で現像した際にミスがあり、報告書にはやむを得ず小型カメラで予備に撮影したものの一部を用いざるを得なかった。



第2図 神園山瓦窯址周辺地形測量図

三、遺 構

1. 1号窯の調査

前回調査の概要

前述したように1号窯については1966年に発掘調査が行われている。ただしこの調査は窯体のみに限られ、灰原については未調査である。以下に前回の窯体の調査所見を簡単にまとめることとする。

1号窯は地下式無階無段登窯で焚口、燃烧部、烧成室からなり、全体の平面形は歪な楕円形を呈している。主軸はN-65°-Wを示し、焚口から窯尻までの長さは約3.2m、焚口の幅0.52m、烧成室の最大幅1.94m、高さ1.80mである。床面は焚口部から奥壁に向かって緩やかに傾斜し、煙道部に続いている。床の傾斜角は16~27°を測る。第2次大戦中は防空壕として利用されていたため、奥壁は二次的に掘り込まれているが、その他には大きな改変は認められない。天井部には一部剥落が見られるがその部分も含めて窯体周壁はひどく焼けており、剥落後にも窯の使用が続けられていたことが伺える。焚口部床面には著しく火を受けた形跡のある石が据えられていた。

烧成室からの瓦の出土は少量で、窯内に堆積した土中から滑石製石鍋1点、瓦器碗2点、土師皿が検出されている。瓦以外の出土遺物については年代がかなり下がるものと考えられており、窯が2次的に利用された可能性も示唆されている。

今回調査の所見

層序 (第4図 図版3上)

1号窯の層序は地山を含めて15層が確認された。その堆積状況から判断してI~IX層までが攪乱層及び自然堆積によるものであり、当時の原状を保っているのはX層以下である(第5図 図版2下)。

I層 表土 黒褐色の腐食土とわずかに焼土粒を含む褐色土とが混在する。瓦小片が出土した。

II層 赤褐色土層 窯壁体が崩れたものと思われる焼土や礫をかなり多く含んでいる。粘性は強い。

III層 黄褐色土層 粘性が強く締まっている。地山に近い土質であり、遺物は見られない。

IV層 赤褐色土層 II層に類似しているが、わずかに粘性が劣る。

V層 黒色土層 焼土粒、炭を多く含む。

VI層 赤褐色土層 IV層に類似するが、IV層に比して小片の焼土粒、炭、礫を多く含み、土質は締まりがなく軟質である。瓦、瓦器、青磁が出土。

VII層 暗黄褐色土層 焼土粒、炭、礫をわずかに含む。瓦、青磁、青銅製品が出土。

VIII層 黄褐色土層 ほぼA・B-1区に限って堆積が見られた土層で、窯壁体片、焼土粒、炭、礫をかなり多く含む。瓦小片が出土。

IX層 黄褐色土層 焼土粒、炭、礫をわずかに含む。瓦が多く出土。

X層 暗褐色土層 焼土粒、炭、礫を多く含む。この層以下が当時の原状を保っていると考えられる。瓦が多く出土。

XI層 褐色土層 焼土粒、炭、礫、黄褐色粘土粒を多く含む。粘性が強い。瓦が多く出土。

XII層 黒色土層 焼土粒、炭を多く含み、粘性が強い。瓦が多く出土。

XIII層 暗褐色土層 焼土粒は見られず、わずかに礫を含む。粘性は弱くやや軟質である。瓦小片が出土。

XIV層 黄褐色土層 堅く締まった粘性の強い土層。わずかに礫を含む。遺物は見られなかった。

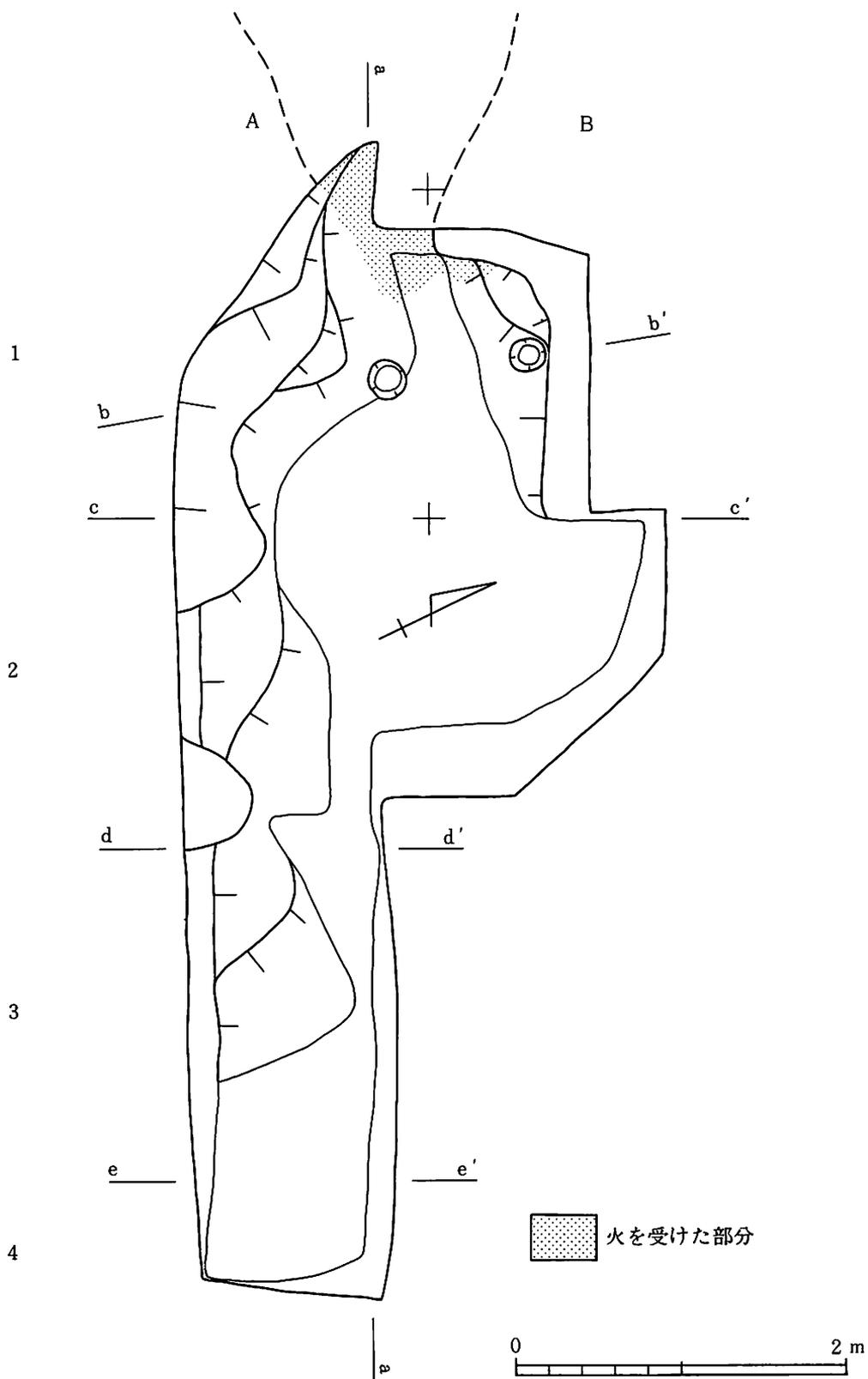
XV層 明黄褐色岩盤層 地山である。焚口に近い部分は赤変している。

遺構（第3・5図 図版2）

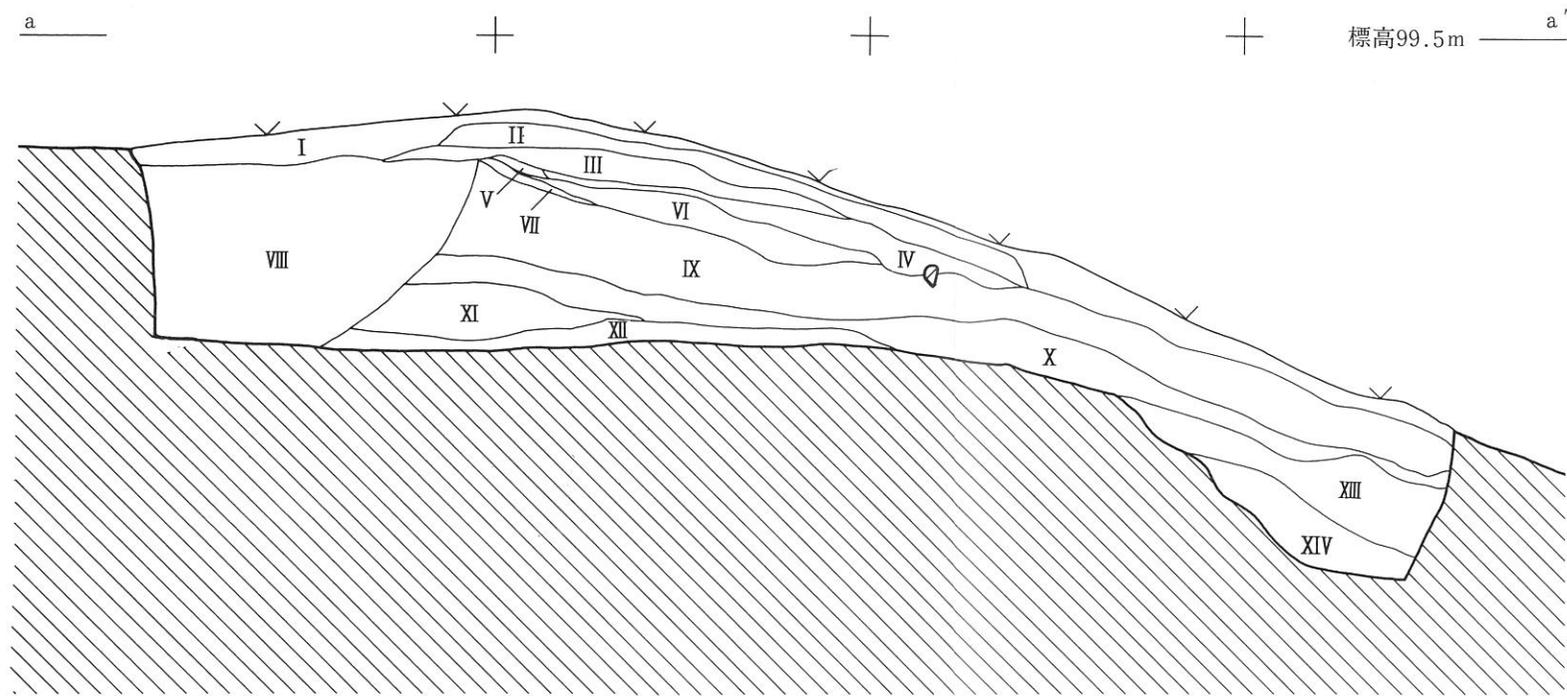
今回の調査では1号窯の灰原は掘り込みを持たず、自然地形をほとんどそのまま利用していることが知られた。操業時の旧地形は窯体の主軸にほぼ沿った方向に地山を平坦に整形した前庭部が約3m続き、その南東側は地山が小川に向かって下降する急傾斜面となっている。前庭部の両側面には壁状にせり出している自然地形を残している。

X～XIII層が操業時に窯から掻き出された灰・焼土・瓦等を含む層である。X層は窯前庭部から急激に地山が落ち込むA-4区にかけてほぼ全面に堆積していたが、瓦は自然地形に沿って流れたかたちで散布しており、特にA-3・4区にかけて多く検出された（第5図）。またXI層及び地山直上に堆積したXIII層の範囲は前庭部平坦面のみ、すなわちA・B-1・2区に限られている。いずれの層でも出土した瓦の数は少なく、かなりの量が小川の方へ流れ落ちたものと考えられる。

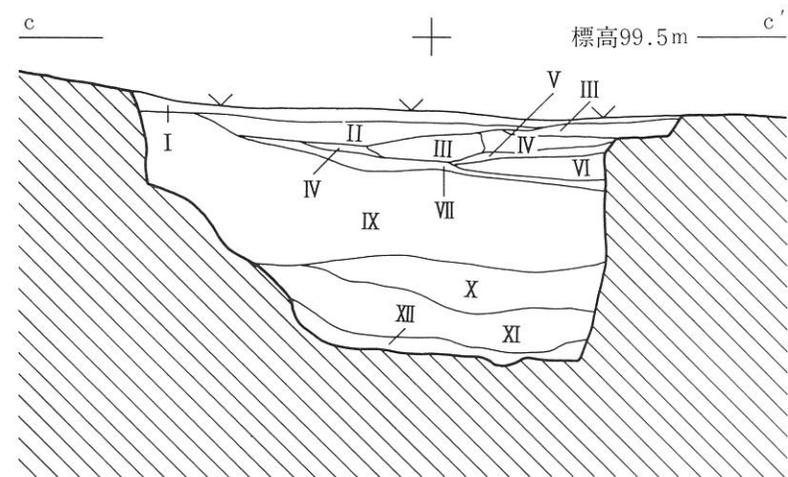
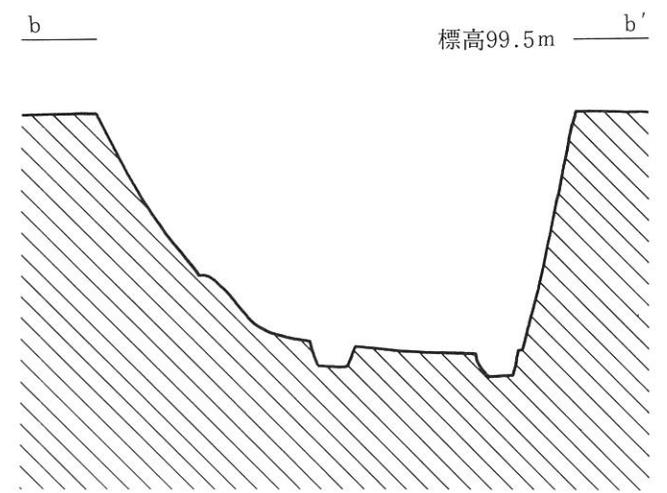
焚口部から前庭部側面がハの字状に広がって行く部分に2基のピットが検出された。ピットはいずれも径20cm、深さ12cmである。ピット内にはXIII層が堆積していた。遺物は検出されていないが、これらのピットは地山直上から掘り込まれており、窯に伴うことは確



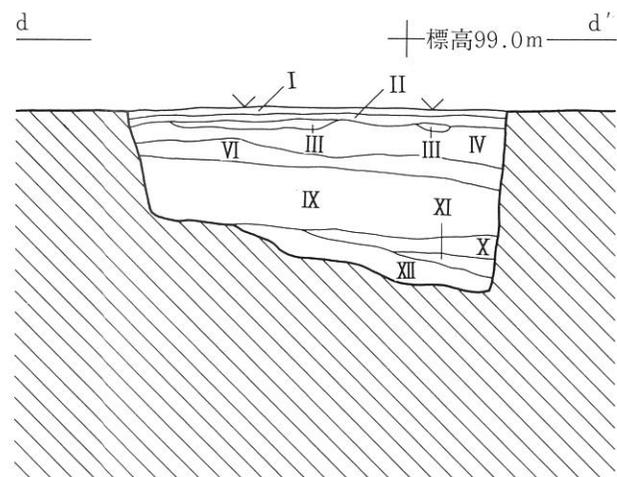
第3図 1号窯掘り上がり図



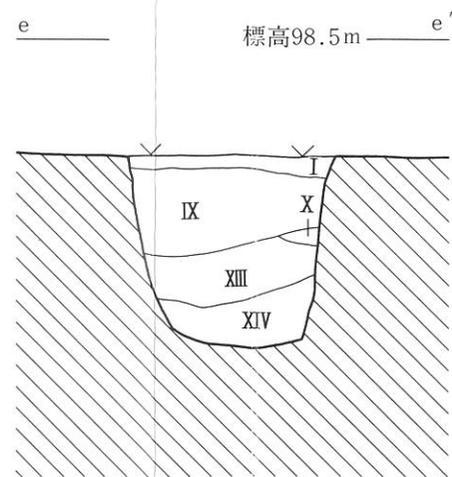
A-1~4区北東壁



A·B-1区南東壁

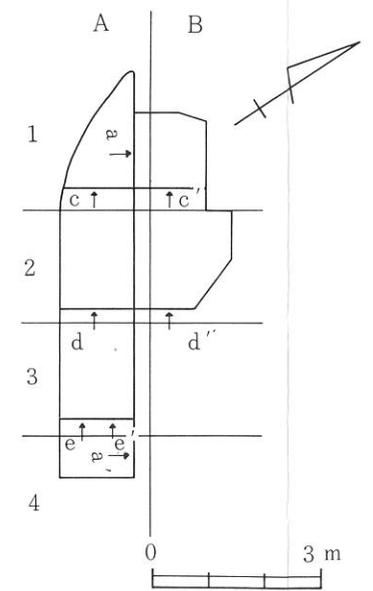


A·B-2区南東壁



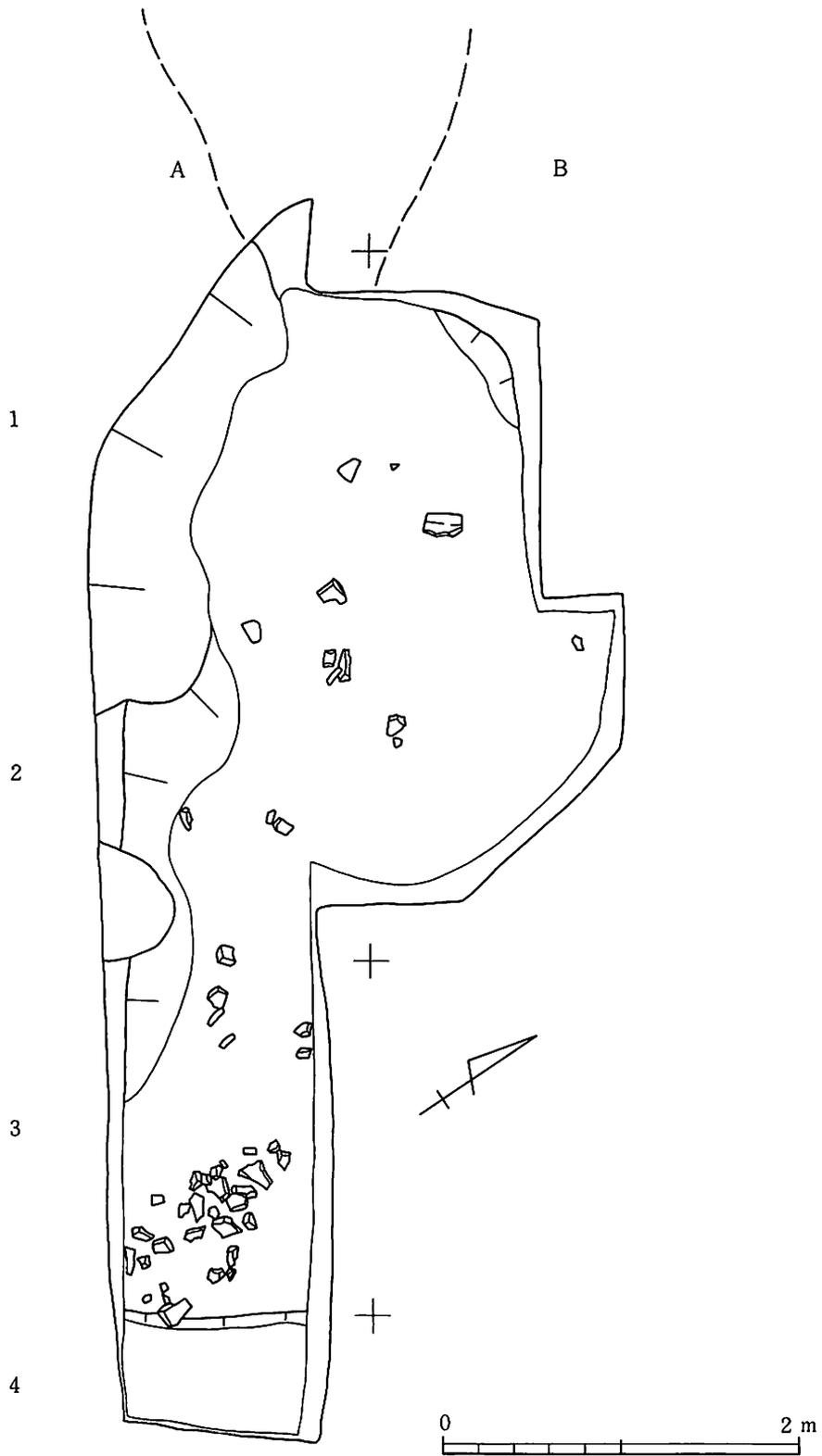
A-3区南東壁

 火を受けた部分
  石



0 3 m

第4図 1号窯土層断面図



第5图 1号窰X層上面瓦出土狀況

実である。ピットの性格については覆屋的建物の柱穴が想定される⁽¹⁾が、今回調査範囲内ではこの2基以外には検出されなかった。

1号窯ではVI・VII層から陶磁器、土器や青銅製品等が出土しており、窯があるいは墳墓等として2次的に利用された可能性が高い。

註(1) 宗像市教育委員会「稲元日焼原」1989年
稲元日焼原窯跡群は5世紀末～8世紀前半の須恵器窯跡である。4基の窯跡のうち4号窯跡前庭部にはピット4基が検出されており、覆屋的な小屋の柱穴の可能性が示唆されている。また窯跡の構造についても神園山1号窯との類似が認められる。

2. 2号窯の調査

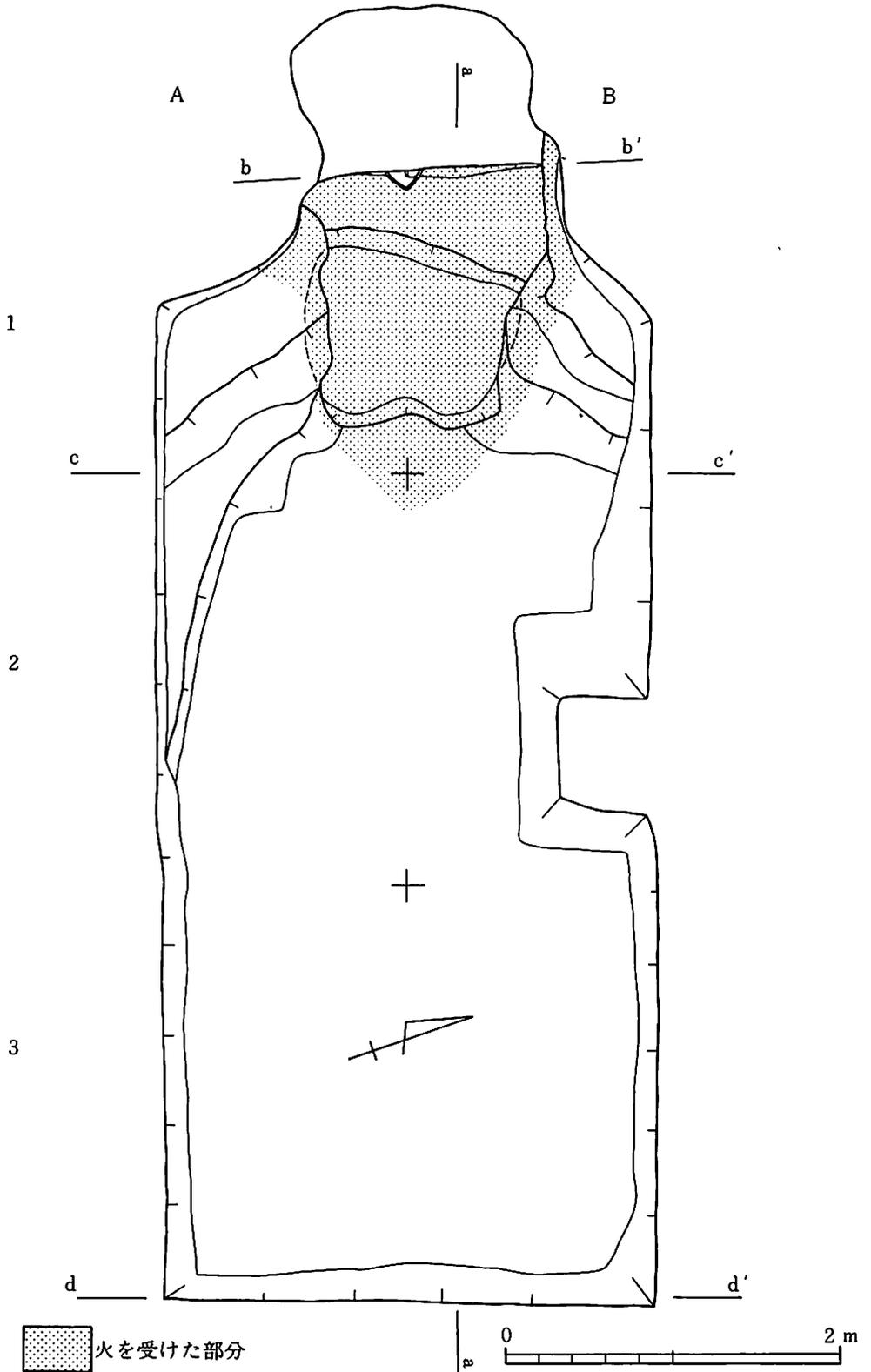
2号窯は1号窯の約4m北側に位置する。窯の主軸はN-72°-Wである。窯体内部は既に天井の一部が陥没しており崩壊する危険性が高いため、調査が行えなかった。窯の構造は1号窯と同様地下式登窯と考えられるが、詳細については不明である。

層序（第7図 図版6）

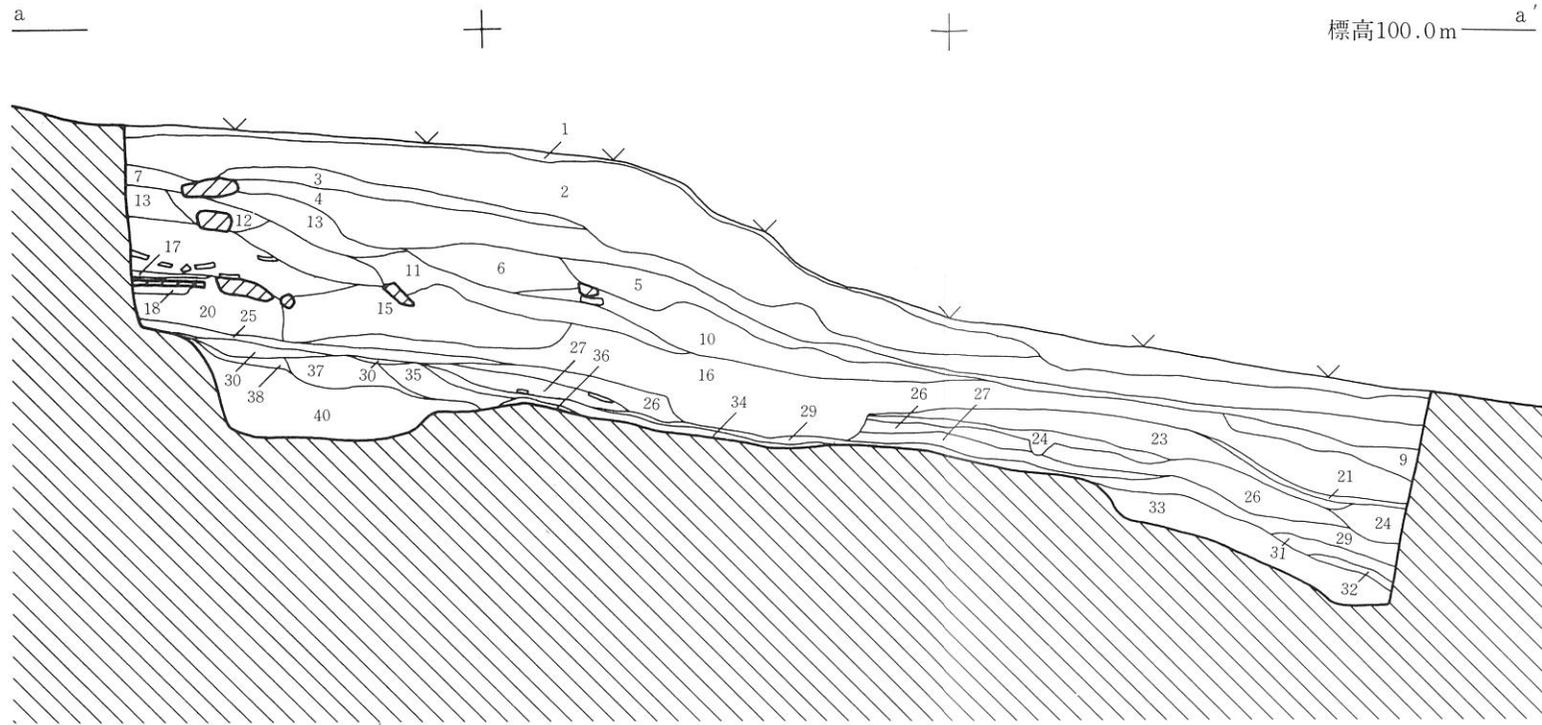
2号窯の層序は地山を含めて41層が確認された。このうち5層以下が原状を保っている。

- 1層 表土 黒褐色の腐食土と赤く焼けた窯壁体片及び小礫を含む赤褐色土が混在する攪乱層である。
- 2層 赤褐色土層 窯壁体片、大小の礫、炭を含み粘性が若干ある。1層の赤褐色土はこの層と同質である。
- 3層 暗黄褐色土層 窯壁体片、礫を含むが少なく、2層よりも粘性が強い。
- 4層 黄褐色土層 窯壁体片、礫はほとんど含まず、3層よりもさらに粘性が強い。
- 5層 暗黄褐色土層 焼土粒、礫を少量含みやや粘性がある。上面から瓦が多く出土。
- 6層 暗黒褐色土層 焼土粒、礫を多く含み、粘性が弱く軟質である。瓦が多く出土。
- 7層 黄褐色土層 焼土粒、礫を含み、粘性がある。
- 8層 黒褐色土層 焼土粒、炭、礫を多く含む。黄褐色の地山のブロックが混入している。
- 9層 黒褐色土層 焼土粒、礫を含む。粘性が弱く軟質で灰質である。
- 10層 黒褐色土層 焼土粒、炭、礫を含み、やや粘性がある。瓦が多く出土した。
- 11層 赤褐色土層 炭、礫及び焼土と地山の大きなブロックを含む。
- 12層 黒褐色土層 焼土粒、礫を少量含む。締まりがなく軟質。13層中に落ち込んでいる。
- 13層 暗赤褐色土層 大きな焼土片を多く含む。12層よりも粘性が強い。

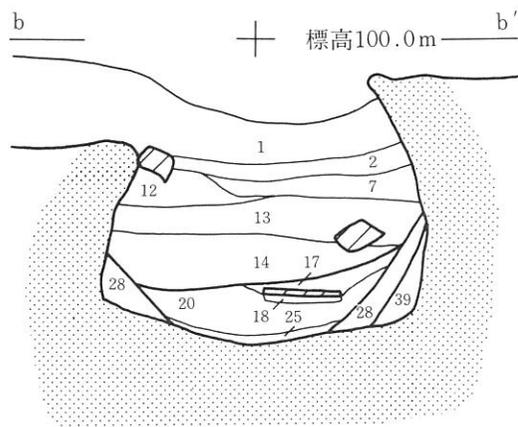
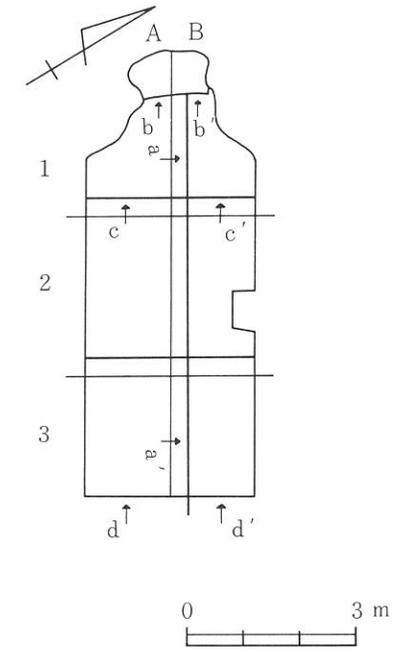
- 14層 におい赤褐色焼土層 やや大きな焼土のブロックが混入し、きめは若干粗いが強く締まっている。下面から軒平瓦を含む多くの瓦が出土。これらの瓦は後述する第3次床面上にある。他に土師器底部片1点が出土している。
- 15層 暗褐色土層 焼土粒、炭、礫を含み、粘性があり締まっている。
- 16層 暗黄褐色土層 焼土粒、炭、礫片を多く含み、粘性はある。瓦が出土。
- 17層 暗青灰色粘土層 強く締まっており、混入物は見られない。この上面が第3次床面である。
- 18層 小礫層 20層上に人為的に敷かれている層で、この層上に板石が置かれている。
- 19層 黄色粘土層 強く締まっている。第3次床面に伴う焚口部の石下部にのみ見られる。
- 20層 赤褐色土層 締まりがなく、感触は粗い砂に近い。青灰色を呈した植物炭化物がブロック状に多く混入している。
- 21層 黒色土層 焼土粒、炭、礫片を含み、粘性が強い。下面から青磁片が出土。
- 22層 暗赤褐色土層 焼土粒を含み、若干粘性がある。
- 23層 赤褐色土層 焼土及び崩壊した窯の壁体片から成り、強く締まっている。20cm程の厚さに堆積している部分もある。人為的に敷き詰められた可能性が高い。遺物数点が出土。
- 24層 極暗赤褐色土層 焼土粒、炭、礫を多く含み、粘性が強い。瓦が多く出土。
- 25層 黒色炭層 炭の単純層である。
- 26層 暗赤褐色土層 焼土粒、窯壁体片、炭、小礫及び黄褐色の地山のブロックを含み、粘性が強く強く締まっている。瓦が多く出土。
- 27層 極暗赤褐色土層 焼土粒、炭、礫を多く含み、粘性が強い。瓦が多く出土。
- 28層 黄褐色粘土層 焚口部両側面に見られる。地山の上に強く締まった粘土が貼りつけられている。第2次床面である。
- 29層 黄褐色土層 地山に近く、粘性が強く締まっている。焼土粒、炭を含む。
- 30層 暗褐色土層 軟質でさらさらしている。
- 31層 褐色土層 礫及び瓦をわずかに含むが、ほとんど混入物はなく強く締まっている。
- 32層 黒色炭層 ほとんど炭であるが、ごくわずかに焼土を含む。
- 33層 黄褐色土層 地山に近い大きな礫を多く含む。瓦が出土。
- 34層 赤褐色焼土層 焼土が堆積した層で、粘性があり締まっている。瓦が出土。
- 35層 暗赤褐色土層 小礫を含み、若干粘性がある。瓦が出土。
- 36層 褐色土層 炭、極小礫及び地山の小さなブロックを含む。粘性は弱い。



第6図 2号窟掘り上がり図



B-1~3区北東壁



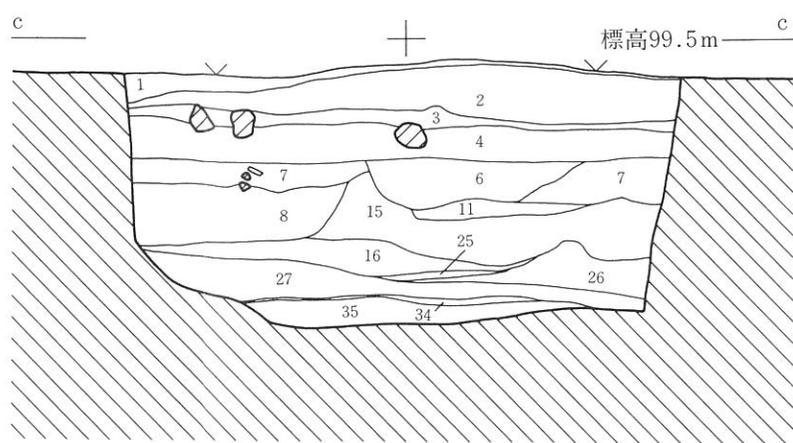
A·B-1区北西壁



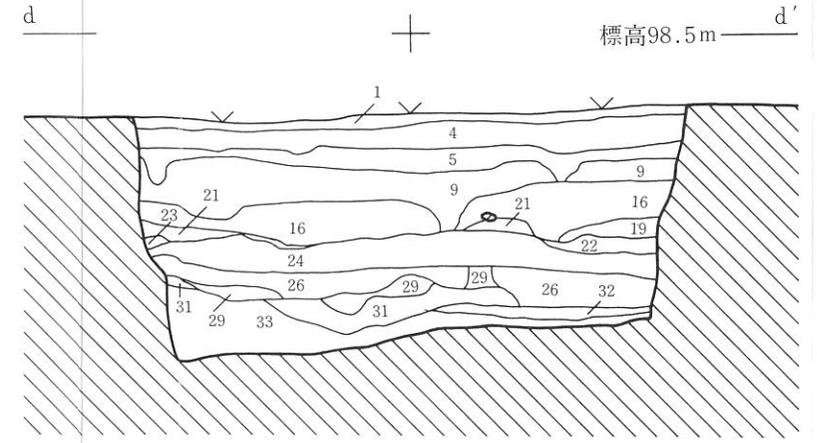
火を受けた部分



石



A·B-1区南東壁



A·B-3区南東壁



第7図 2号窯土層断面図

37層 明赤褐色土層 きめが細かく粘性は弱い。

38層 黒色炭層 炭の単純層である。

39層 赤褐色粘土層 焚口部北東側側面に見られる。地山の上、28層の下に、堅く締まった粘土が貼り付けられている。第1次床面に伴う面と考えられる。

40層 明赤褐色土層 楕円形を呈する掘り込み内に窯壁体や礫が堆積している。

41層 明黄褐色岩盤層 地山である。焚口に近い部分は赤変している。

焚口部および灰原の調査所見（第6・8図 図版4・5）

2号窯の調査では焚口部の構造に、2回の造り替えが認められ、最低3次にわたる使用が確認された。以下記述の都合上、第1次操業、第2次操業、第3次操業と仮称してそれぞれ焚口部の構造及びそれに伴う灰原の状況について説明する。

第1次操業（第6図 図版5上）

地山を掘り込んで焚口としており、焚口部への石材の使用は認められない。焚口部の幅は1.3mを測る。掘り込みは1.1×1.3mの楕円形を呈しており、深さ0.3mである。焚口部からA・B-2区まで、地山は著しく赤変している。前庭部は地山を平坦にわずかに整形しているが、この部分には第1次操業に対応する灰原は確認できない。A・B-1区北西壁の土層断面の観察によると第1次床面直上、第2次床面の下に北東側のみ粘土層(39層)が張り足されていることがわかる。すなわち第1次操業面には1度の補修が確認される。

第2次操業（第8図）

第1次操業の際の焚口部掘り込みが埋没した後、第2次焚口が形成されたことが推測されるが、実際の状況は第3次焚口部形成の際に破壊されているため、確認できない。ただし北東側にほぼ垂直に立てられた石①が第2次焚口部に使用された石材である可能性は高い。A・B-1区北西壁の土層断面観察で確認される第2次床面は、地山直上及び39層直上に貼り足された粘土層(28層)上面である。この第2次床面に対応する焼土の広がりには34層であり、この焼土層で多くの瓦が出土した(図版7下)。これらの状況から第2次操業に対応する灰原は掘り込みを持たず、自然地形をそのまま利用したものであろう。

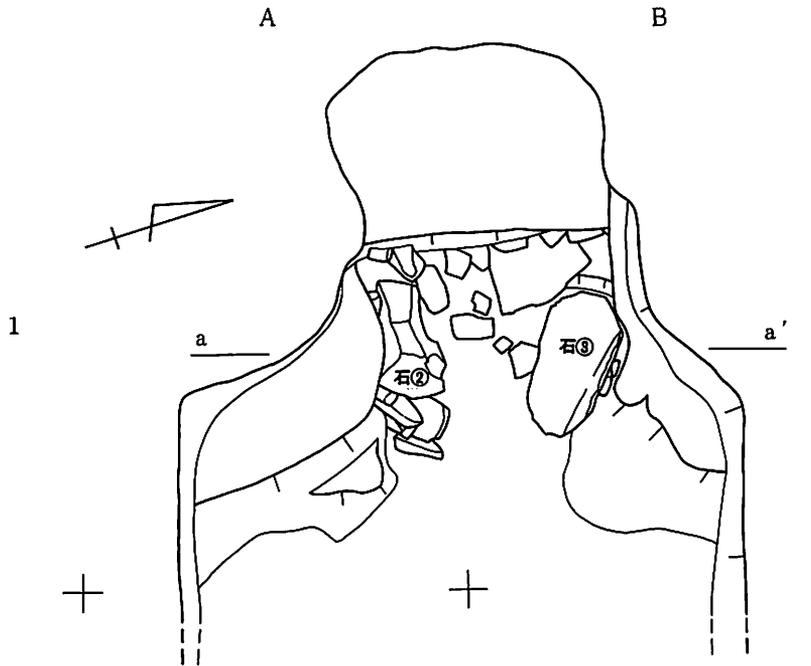
第3次操業（第8図 図版4）

第2次使用面が埋没した後、60×40×80~140cmの大型の石材2個を用いて焚口部を形成している。今回の調査で確認された最終焚口部であり、焚口部の幅は約0.6mを測る。2個の石材のうち北東側の石③は倒れた状態で検出されたが、南西側の石②はしっかりと

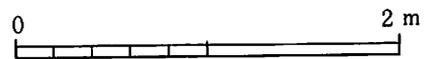
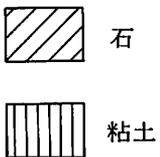
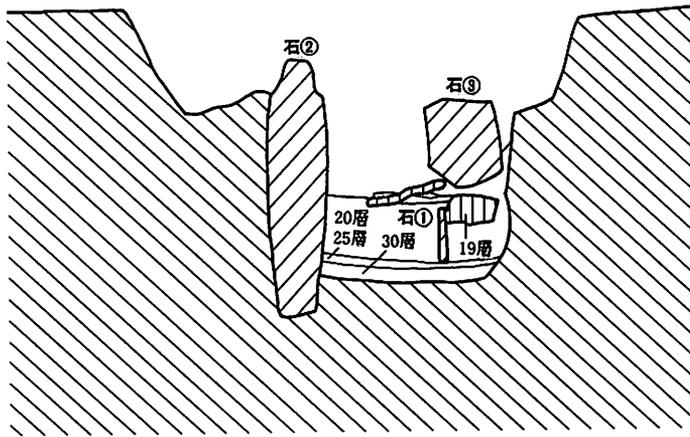
据えられ、その周辺には石②を固定するように中・小型の石多数が検出された。この石②は焚口部南西壁の地山を削り、さらに第2次操業面を掘り込んで据えられている。一方石③は、石①の上に堅い粘土層（19層）を敷き詰めて、さらにその上に据えられており、石②とちょうど対応する形となっている。第8図土層断面に見られるように20層直上に小礫を敷き（18層）、その上に厚さ3cm程の板石をほぼ水平に据え、さらにその上に堅い粘土層（17層）を貼り足して第3次床面を形成していることがわかる。

焚口部から3m程離れたところに径2mの掘り込みが設けられており、そこには16層が堆積している。この掘り込みが第3次操業に対応する灰原であるが、この灰原はごく小規模な一時的なものと考えられ、灰原は基本的にはやはり自然地形をそのまま利用したものである。またA・B-3区一带に第3次操業に対応する焼土層（23層）が認められるが、23層はこの場所で火を受けて形成されたものではなく、人為的に上面を平坦にして敷き詰められたものである。

以上述べて来たように2号窯の灰原も基本的には1号窯同様、特に掘り込みを持たず、自然地形を利用したものである。操業当初の旧地形も1号窯と同様、焚口部から南東の小川の方へほぼ平坦な地形が続き、A・B-3区の南東側は地山が急激に落ち込んだ傾斜面となっている。瓦の出土量は1号窯に比較すると多いが、一般的な灰原からの出土とするには少なく、ここでも多くの瓦が小川へ流れ落ちたことが予想される。



a ———— + 標高1,000m ———— a'



第 8 图 2 号窟第 3 次焚口部实测图

四、出土遺物

1. 瓦

今回の調査で出土した瓦片の総数は700余点である。1・2号窯ともに、そのほとんどが平瓦及び丸瓦であり、その他軒平瓦が7点、鬼瓦が1点、鷗尾1点が出土したが、いずれも小片で、軒丸瓦の出土は皆無であった。また、完全な状態で検出されたものは1点もなく、大きめの瓦片でも大半がその2/3以上を欠損している。

(1) 平瓦

出土した平瓦片は、その多くが曲率が1/4の円弧を示し、なおかつ側面の切口断面が円弧の直径の方向を持つこと、側面に粘土円筒を分割した際の内側からの切り込みを持つこと、分割突帯による溝状の痕跡を示すもの、粘土板の継ぎ目を持つことなど桶巻作りによる製作を示す諸要素を合わせ持っており、確認される限り当瓦窯における平瓦製作は桶巻作りであったと言えよう。また、ほとんどが粘土紐作りで製作されているが、粘土板作りのものも若干量含まれている。

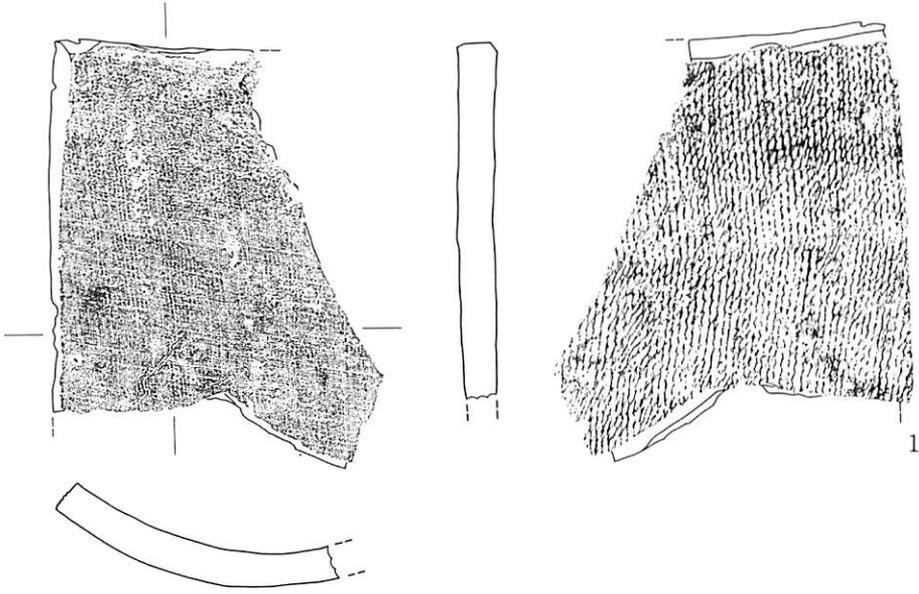
平瓦は凸面の調整技法から、大きくⅠ～Ⅲの3類に大別でき、更にⅠ・Ⅱ類はそれぞれその厚さからⅠ-a～c類、Ⅱ-a～d類に細分を行った。

Ⅰ類（第9図1・2、第10図3、第11図6 図版8上・中・下、10上・下）

凸面に縄目叩きが施されたものである。叩打痕より観察すると広端面より狭端面に向かって叩きしめられており、縄目は側面とほぼ並行に残るものが主である。叩きの原体の大きさは様々で、幅5cm程度のものからかなり大きめのものも存在する。また、縄の太さも様々だが左撚りのものが主である。完形のものはいずれも皆無であるが、全長35cm前後、広端幅、狭端幅は22～20cm前後と推定される。凹面には布目痕が残る。側面に分割時の内側からの切り込みを残すこと、分割突帯の痕跡を持つこと、曲率が1/4円弧を示し、側面の切口断面が直径方向を向くことなどから桶巻作りによって製作されたものと思われる。

Ⅰ類はその厚さより更に三つに分類した。

Ⅰ-a類（1・6） 厚さ1.5～2.0cm未満の薄手のものである。焼成は良く、暗灰色を呈するものが主である。胎土は一般的に硬質・緻密であるが、軟質・砂質のものも少数存在する。また、側面とほぼ並行に縄目叩きが施されるものに加えて、狭端面から広端面に向かって円弧を描く様に叩き締められるものも認められ、後者については側面が一回ある



1



2



第9図 出土遺物実測図(1)
1：平瓦I-a類 2：平瓦I-b類

いは二回の縦ケズリによって調整されるものが多い。

I—b類(2) 厚さ2.0~3.0cm未満のものである。焼成はあまいものが多く、色調は黄橙色、橙色、赤褐色、灰白色、暗灰色など様々である。胎土は軟質・砂質のものがかなりの割合で存在する。また、側面とほぼ並行に縄目叩きが施されるものに加えて、狭端面から広端面に向かって円弧を描く様に叩き締められるものも存在する。

I—c類(3) 厚さ3.0cm以上に及ぶ厚手のものである。焼成はあまく、黄橙色、橙色を呈するものがほとんどであるが、まれに赤褐色を呈し、堅く焼き締められたものもある。胎土は概して緻密である。

II類(第10図4、第11図5、第12図7、第13図10 図版9上・中・下、10下)

凸面が板状工具によって叩き締められるものである。板状叩きの単位が分かるものからと、凸面上の中程に一条の横位の縄目を持つものが多く存在することから判断すると幅1.8cm程度の細長い板を綴じ合わせた工具が想定される。わずかに縄目の痕跡が残るものも見られることより、縄目叩きを施した後、更に板状工具によって叩き締めを行った可能性がある。また、凸面にナデ調整を施すものも含まれる。凹面には布目痕が見られる。側面に内側からの切り込みを持つものは無く、すべて縦ケズリによって整形される。焼成は概しく良く、胎土は硬質・緻密なものが多いが砂質のものも少なからず存在する。色調は黄橙色、橙色、赤褐色のいずれかを呈する。全長は明らかではないが、広端幅、狭端幅は22~20cm前後と推定される。

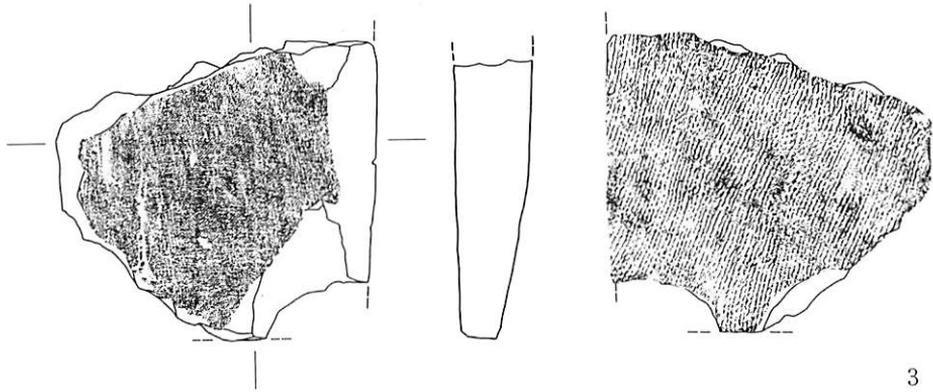
II類もI類と同様、厚さから四つに分類したが、I類が厚さによって焼成及び色調にある程度のまとまりが見られるのに対し、II類はそれほど明確なまとまりは確認されなかった。

II—a類(7) 厚さ1.5~2.0cm未満のものである。出土数は僅小ですべて小片である。焼成はあまく、色調は橙色、胎土は軟質・砂質である。

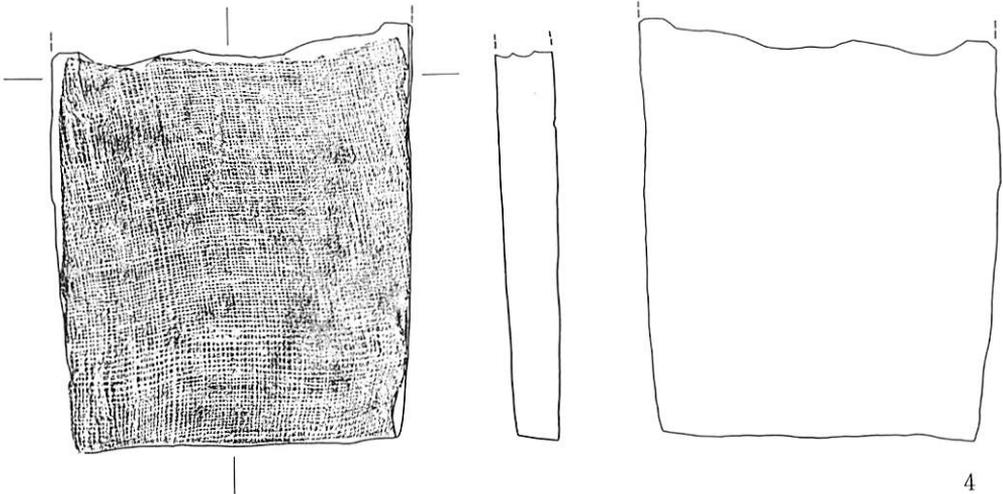
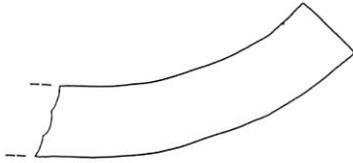
II—b類(4) 厚さ2.0~3.0cm未満のものである。焼成は良いものからあまいものまで様々であり、色調は黄橙色、橙色、赤褐色を呈する。胎土は硬質・緻密なもの、軟質・砂質のものが混在する。

II—c類(5) 厚さ3.0cm以上のものである。II—b類と同様、焼成は良いものからあまいものまであり、色調も黄橙色、橙色、赤褐色などを呈するものが混在するが、胎土は硬質で緻密なものが多い。

II—d類(10) 中央部の厚さが3cm程であるのに対し、側面付近では厚さ1.2cm程に



3



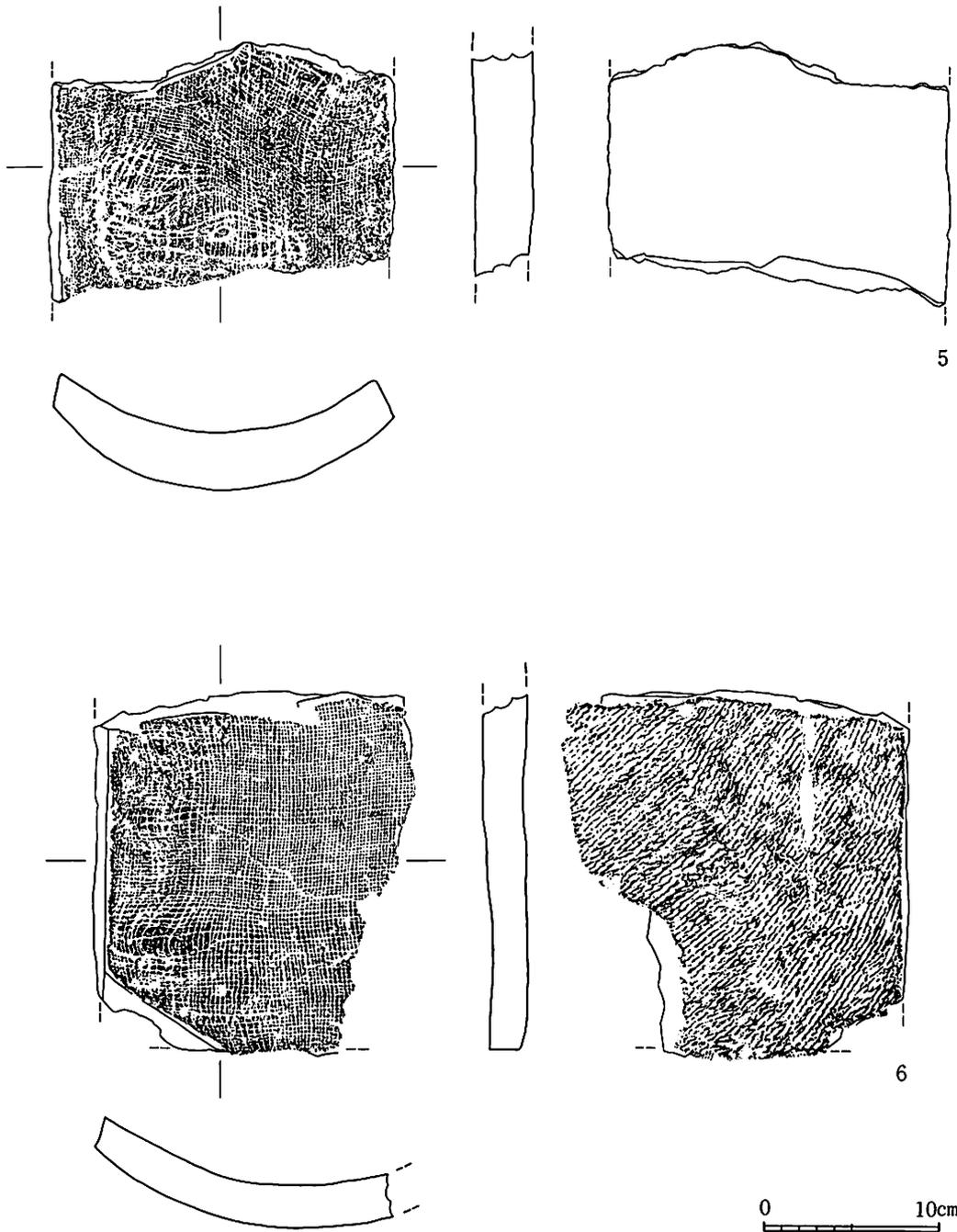
4



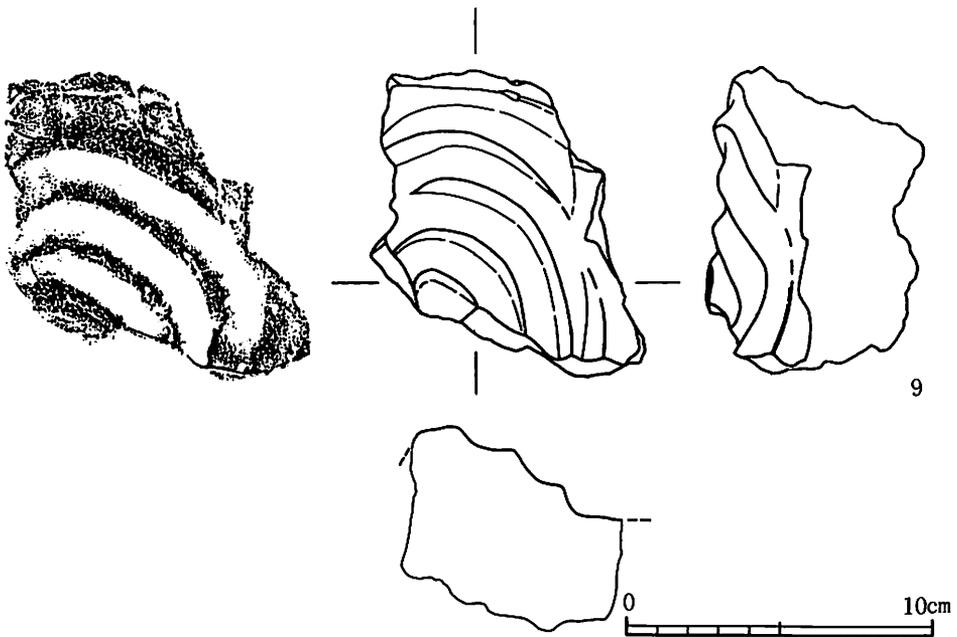
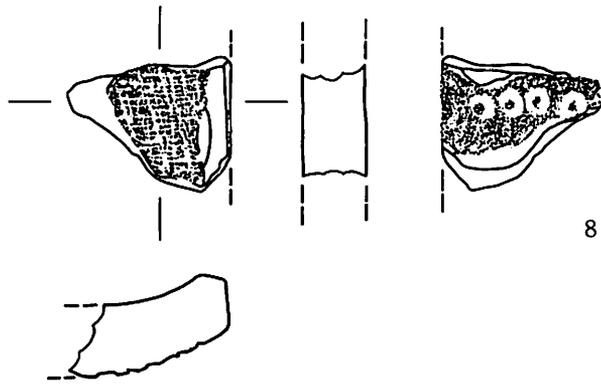
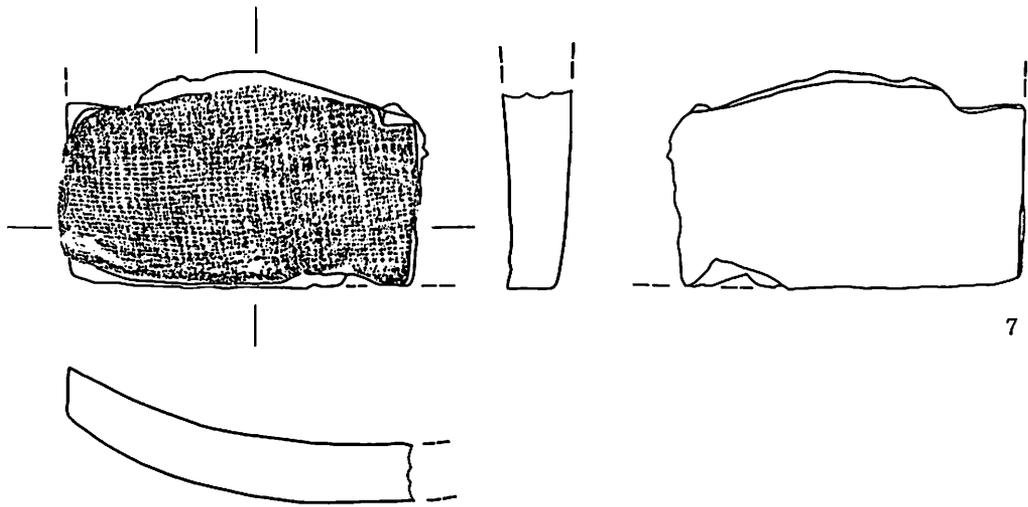
0 10cm

 A horizontal scale bar with a vertical tick at 0 on the left and 10cm on the right. The bar is divided into five equal segments.

第10図 出土遺物実測図(2)
 3：平瓦Ⅰ-c類 4：平瓦Ⅱ-b類



第11圖 出土遺物実測図(3)
 5：平瓦II-c類 6：平瓦I-a類



第12図 出土遺物実測図(4)

7：平瓦II-a類 8：平瓦(竹管文) 9：鬼瓦

薄くなるものである。この厚さの違いについては意図的な粘土の削り取りが行われたものと考えられ、製作技法の一つとして捉えることができよう。色調は赤褐色、胎土は硬質・緻密で強く焼き締められている。全長及び幅は不明である。

Ⅲ類（第13図11 図版11上・中）

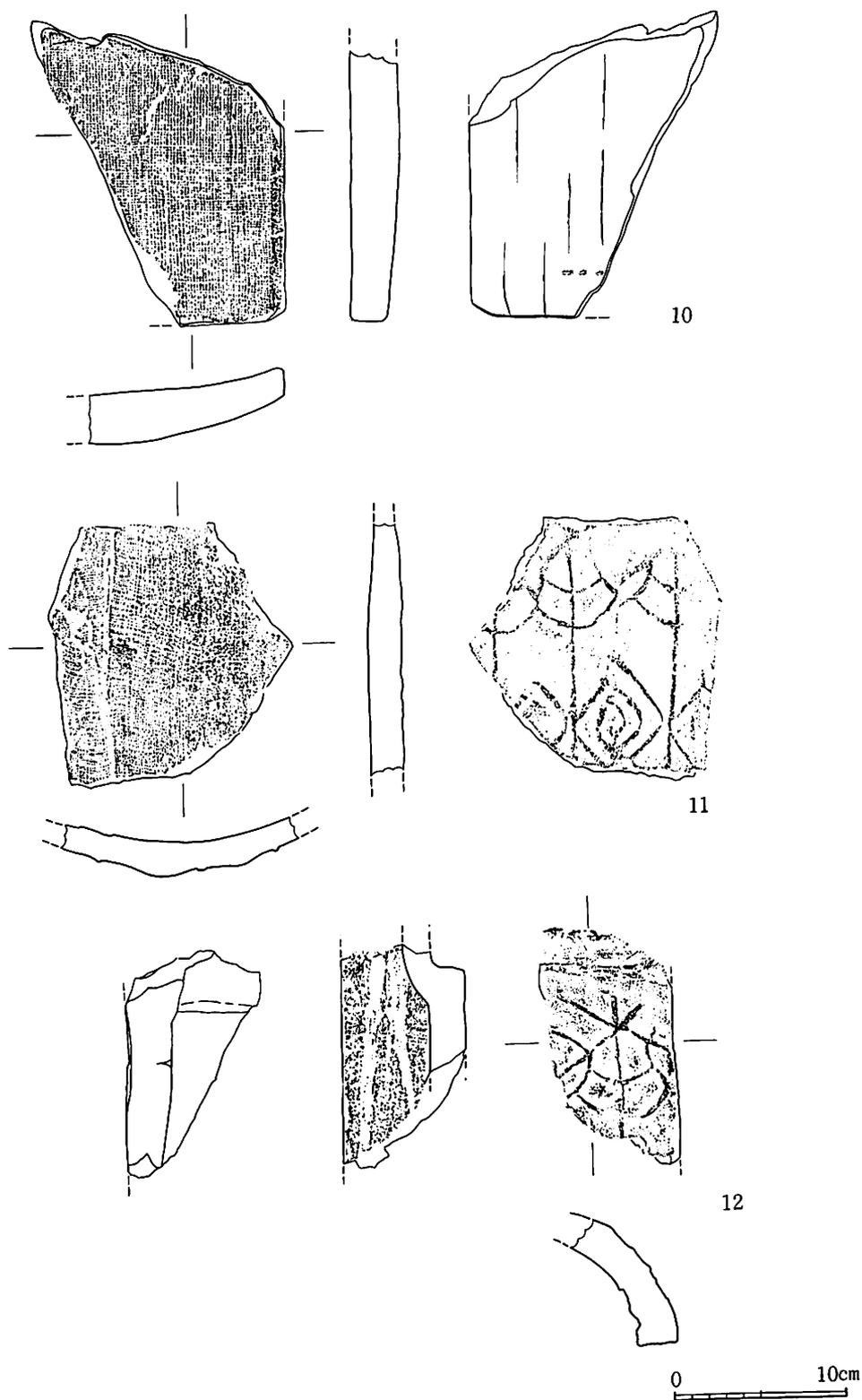
凸面に木葉の葉脈状の幾何学文様を持つものである。凸面はナデ調整が施されるがヘラ状工具の痕跡は認められず、細かなカキ目跡が見られる。葉脈状の幾何学文様はこのナデ調整された面を叩打することによって施されている。この葉脈状文は一単位が幅約5cm程と思われるが、凸面上で横に幾つか並ぶものもあれば、一叩き分しか認められないものもある。側面の切口断面は円弧の直径の方向を向くが、曲率は小さく平坦に近いものも存在する。また、凹面の布目が各所で潰れており、桶巻作りによって製作した後に凸面台上で二次調整を行い、葉脈状文がこの二次調整の際に施された可能性も考えられる。全長及び幅が推定できるものは皆無であったが、例外的には幅30cmにも及ぶ瓦片が一点採集されている。側面は破面を残すものもあるが、ほとんどが二回あるいは三回の縦ケズリによって丁寧に面取りがなされており、端面にも同様の整形が施される。焼成は良く、色調は灰白色、赤褐色を呈し、胎土は硬質・緻密である。肥後国分僧寺跡⁽¹⁾でこの類の瓦の出土が知られている。

以上、平瓦を大きく3類にわけて概観したが、この他特殊なものとして竹管状の文様を持つ瓦片が1点出土した（第12図8 図版13下右）。この竹管状文をもつ瓦片は、小片であるため全形は把握できないが、ナデ調整された凸面上に直径8mm程の竹管状の文様が横一列に並ぶ。凹面は布目、側面の切口断面は垂直を示し、三回の面取り整形が施される。焼成は良く、色調は橙色、胎土は硬質・緻密である。平瓦の分類におけるⅡ類に相当するものと思われる。

(2) 丸瓦

平瓦に次いで出土数が多く、端部が残るものはすべて玉縁付きの丸瓦である。ほとんどが側面に内側からの切り込みを持ち、曲率が1/2円弧を示すことより、粘土紐を巻き付けた粘土円筒を分割することによって製作されたと考えられる。玉縁部は別作りにし、段になる部分に粘土を加えて筒部と接合しており、明確に段を示すもの、段があいまいなもの、スローブ状に斜めにつながるものの三種類が存在する。ほとんどが小片で玉縁部分を残すものも少なく、全形を把握することはできなかった。厚さは1.5～2.5cmの間に集中する。

丸瓦も平瓦に沿って分類を行い、筒部凸面の状況で縄目の叩き痕を残すもの（Ⅰ類）、



第13圖 出土遺物実測図(5)

10：平瓦II—b類 11：平瓦III類 12：丸瓦(葉脈文)

板状工具による叩きが施されるもの（II類）の二種類に分けられ、I類はさらに二つに細分した。

I類（第14図13・14 図版11下、12上・中）

凸面に縄目叩きが施されるものである。焼成は良く、色調は暗灰色を呈し、胎土は硬質・緻密である。全長は不明だが、大きめのもので筒部径は14cm、玉縁部径は12cm程と推定される。

I—a類（13） 縄目痕が筒部全体に残るものである。筒部の端面から玉縁部方向に向かって叩き締められており、縄目は側面とほぼ並行に見られる。

I—b類（14） 縄目が部分的に擦り消されるものである。縄目は側面に対して斜め方向に残り、筒部と玉縁部が接するあたりで擦り消されている。

II類（第14図15 図版12下）

凸面が板状工具によって叩き締められるものである。平瓦II類に見られるほど板状工具の痕跡は明瞭ではなく、叩き締めた後に手のひらあるいは指などを使ってナデ調整が行われたと思われる。焼成は良く、色調は橙色あるいは赤褐色を呈す。胎土は硬質で緻密なものが多いが、砂質のものも少数存在する。

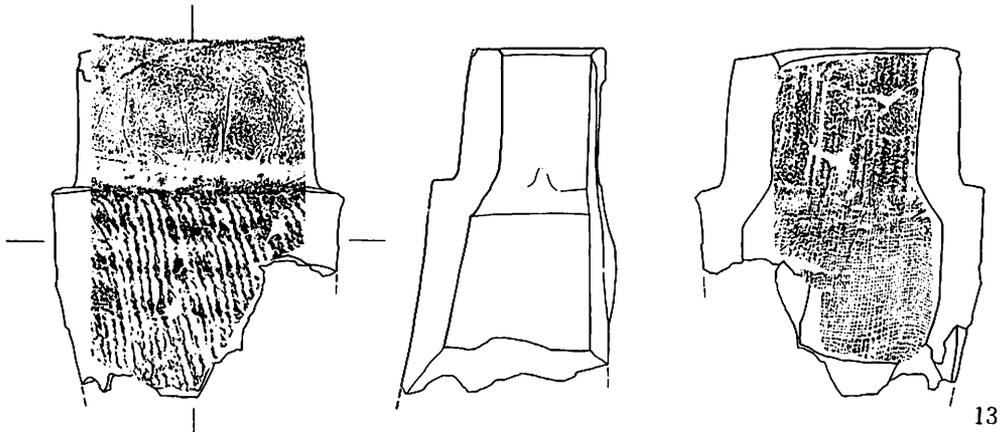
このI・II類の他、特殊な例として凸面に平瓦におけるIII類と同じ葉脈状の幾何学文様をもつ瓦片が一点出土した（第13図12 図版13上）。葉脈状文は側面と並行に数単位並んでいたものと思われ、III類の平瓦に見られるような細かなカキ目は確認されなかった。焼成は堅緻で色調は赤褐色、胎土は密である。

(3) 軒平瓦（第15図17・18 図版13中・下左）

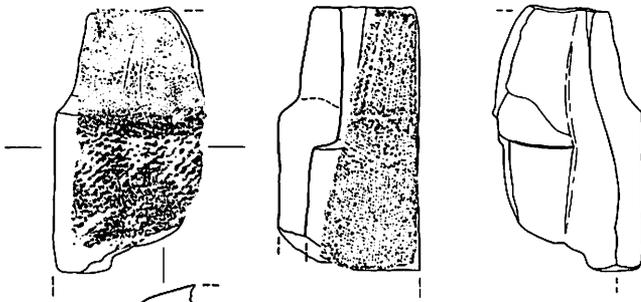
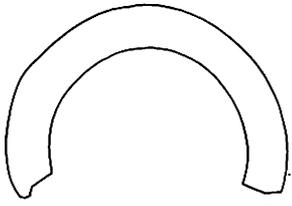
軒平瓦は7点出土している。いずれも小片で、瓦当部分が残るものはそのうち3点であり、すべて右側端部に相当する。

瓦当文様によって二つに分類できる。

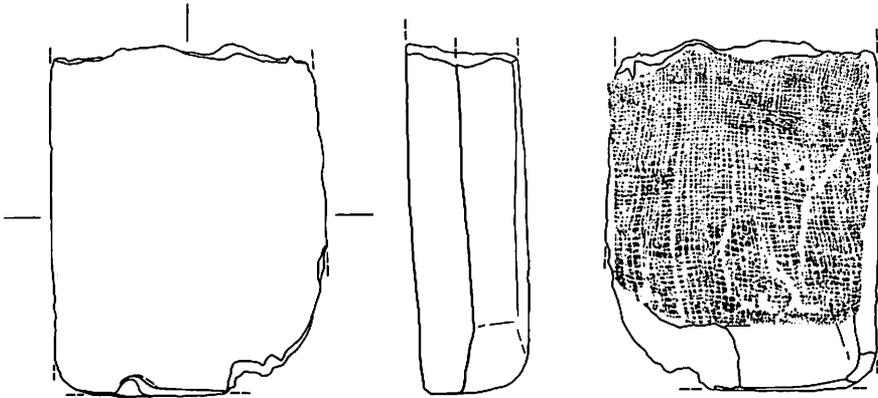
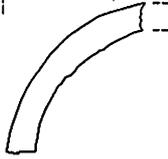
I類（17） 瓦当面内区に簡略化した唐草文を施し、その外側に珠文を一つ配するものである。外区は省略されている。6点が出土している。顎部の段を残すものはないが、凸面の傾斜から見て小さな段を持つか、あるいは段を持たずに緩やかに傾斜しながら平瓦部と接続していたものと思われる。凸面には正格子目叩きが施されており、叩打具の一単位の幅は約7.5cmと推定される。格子目叩きは瓦当部の先端まで明瞭に残り、叩き締めを行って平瓦の形に整形した後に瓦当范に押し付けて文様を形作った可能性が考えられる。焼成はややあまく、色調は橙色、あるいは黄橙色を呈する。胎土は比較的密であるが軟質で、



13



14



15



第14図 出土遺物実測図(6)

13: 丸瓦 I-a 類 14: 丸瓦 I-b 類 15: 丸瓦 II 類

砂質のものも含まれる。肥後国分僧寺跡出土軒平瓦のNHⅦ類に相当する⁽²⁾。

Ⅱ類(18) 平坦な瓦当面に矢印状、あるいは有軸羽状文と言うべき文様を持つもので、1点のみ出土している。中心から右に向かって三単位の羽状文を持ち、軸にあたる部分が凹面側にかなり片寄っている。顎は5cm程の幅を持って平瓦部と段差を持ってつながる。凸面は縄目が残るが、顎の部分は叩き締めた後にナデ調整がなされる。製作順序としてはまず平瓦部を叩き締めて成型し、更に粘土を張り付けて顎部を形作った後に施文したと考えられる。焼成は良く、色調は凸面は暗灰色、凹面は橙色を呈し、胎土は硬質・緻密である。肥後国分僧寺跡出土軒平瓦NHⅧ類に相当する⁽³⁾。

(4) 鬼瓦(第12図9 図版14上左)

鬼瓦は1点出土しており、左眼の盛り上がり部分の小片である。描線の深淺の差が大きく、かなり立体的である。焼成は良く、色調は赤褐色、胎土は硬質・緻密である。

(5) 鷗尾(第15図16 図版14上右)

鷗尾胴部の左端縁にあたる部分の破片である。実測図で見るところの、凸面、端面、凹面は、手のひらあるいは指による丁寧なナデ調整が施されており、文様は見られない。端面と凸面の境が丸く仕上げられているのに対し、端面と凹面の境は明瞭に角を作り出している。焼成は良く、色調は赤褐色、胎土は硬質・緻密である。

2. その他の出土遺物

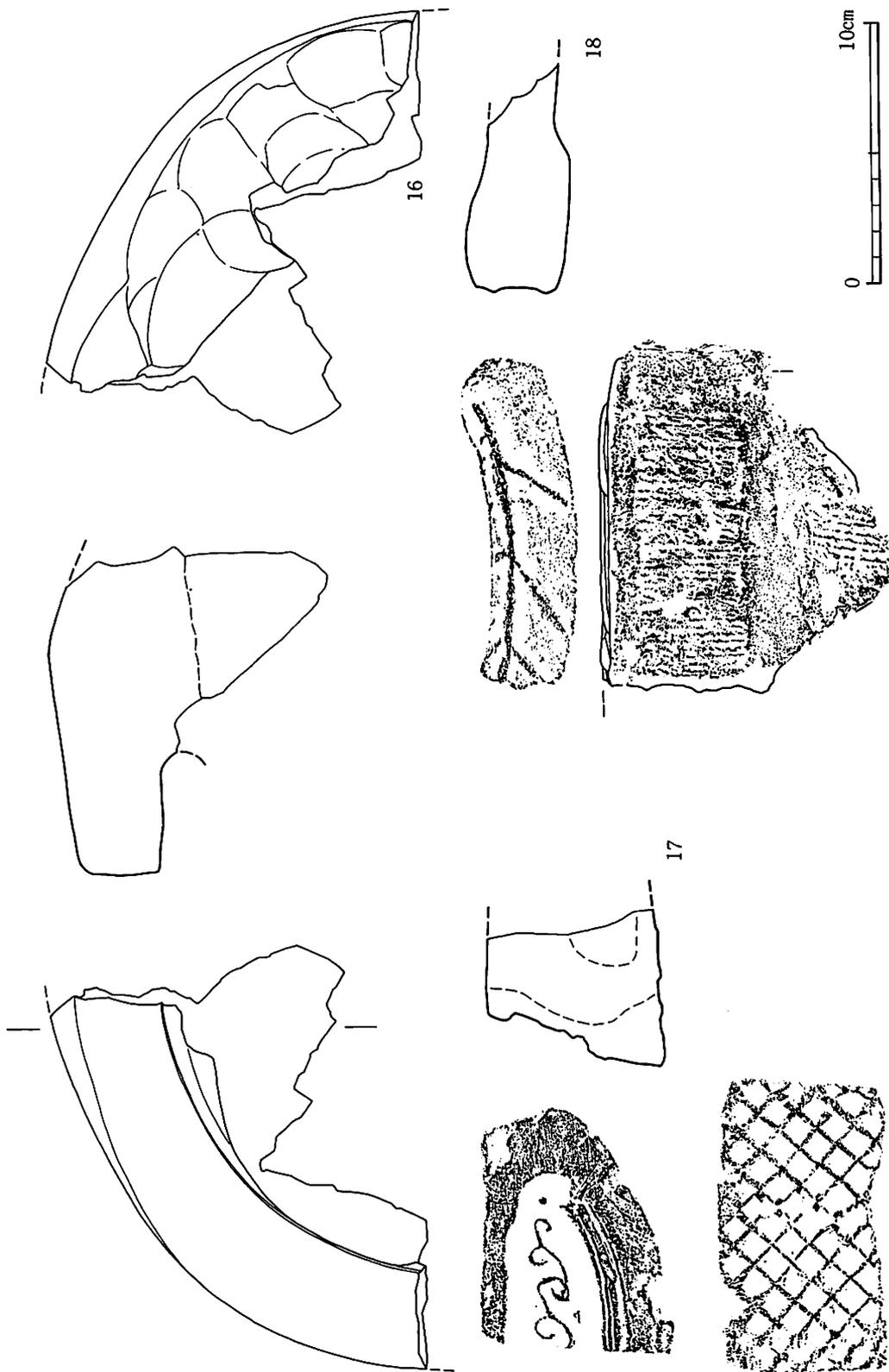
今回の発掘調査では瓦以外に土器・陶磁器・石製品および青銅製品の計約60点が出土している。両窯を比較すると2号窯よりも1号窯のほうが出土数が多い。その出土遺物の9割以上を土器および陶磁器が占めている。これらの大半はかなり磨滅しており、完形近くにまで復元できる程に残りのよい資料もほとんどなかった。また、両方の窯址から出土した遺物の内容については、時期的にも器種構成的にもほとんど同じ様相を呈していた。従って出土遺物の説明は窯址ごとではなく、全体をとりまとめるかたちで行った。

土器(第16図1・2・6・7・9~13・15~18 図版14下)

(1) 土師質土器

器種を推定できるものでは、鉢・碗・皿が出土している。全体的にもこれらの器種が中心である。

1は口縁部破片である。鉢形の器種が想定される。口縁部は玉縁状に肥厚しており、横位のナデ調整が施されている。色調は黄橙色を呈している。6・7は鉢の口縁部破片であ



第15図 出土遺物実測図(7)
 16: 鴟尾 17: 軒平瓦 I類 18: 軒平瓦 II類

る。6は胴部から口縁部にかけて徐々に開き、口縁部が外反している。内外器面はハケ状工具によって粗く調整されており、口縁部のみ横位のナデ調整が施されている。胎土は砂質、焼成がややあまい粗製の土器で、外器面はにぶい褐色、内器面は暗褐色を呈している。7は6と同様の胎土・焼成であるが、口縁部形態が異なり、内器面側から外器面側へナデつけて逆「L」字状に仕上げている。内外器面はナデ調整してある。13・17は皿の底部破片である。13は回転糸切り底で、内底部はナデ調整してある。内底部が部分的に黒く変色していることから灯明皿であると思われる。復元口径が15.6cmであることも考えると12世紀代に比定できる。17は僅かに開く断面三角形の脚が貼り付けられている。底部の切り放しの技法は確認できなかった。器面はナデ調整されている。16は碗の底部破片である。断面三角形の短い脚が貼り付けられている。かなり磨滅しており、器面調整は判然としない。18は碗の底部破片である。外側へ張り出す短い脚が貼り付けられている。碗部の内外器面にはミズビキ痕が観察できる。17・18はその脚の形態から10～11世紀代のものと考えられる。

(2) 瓦質土器

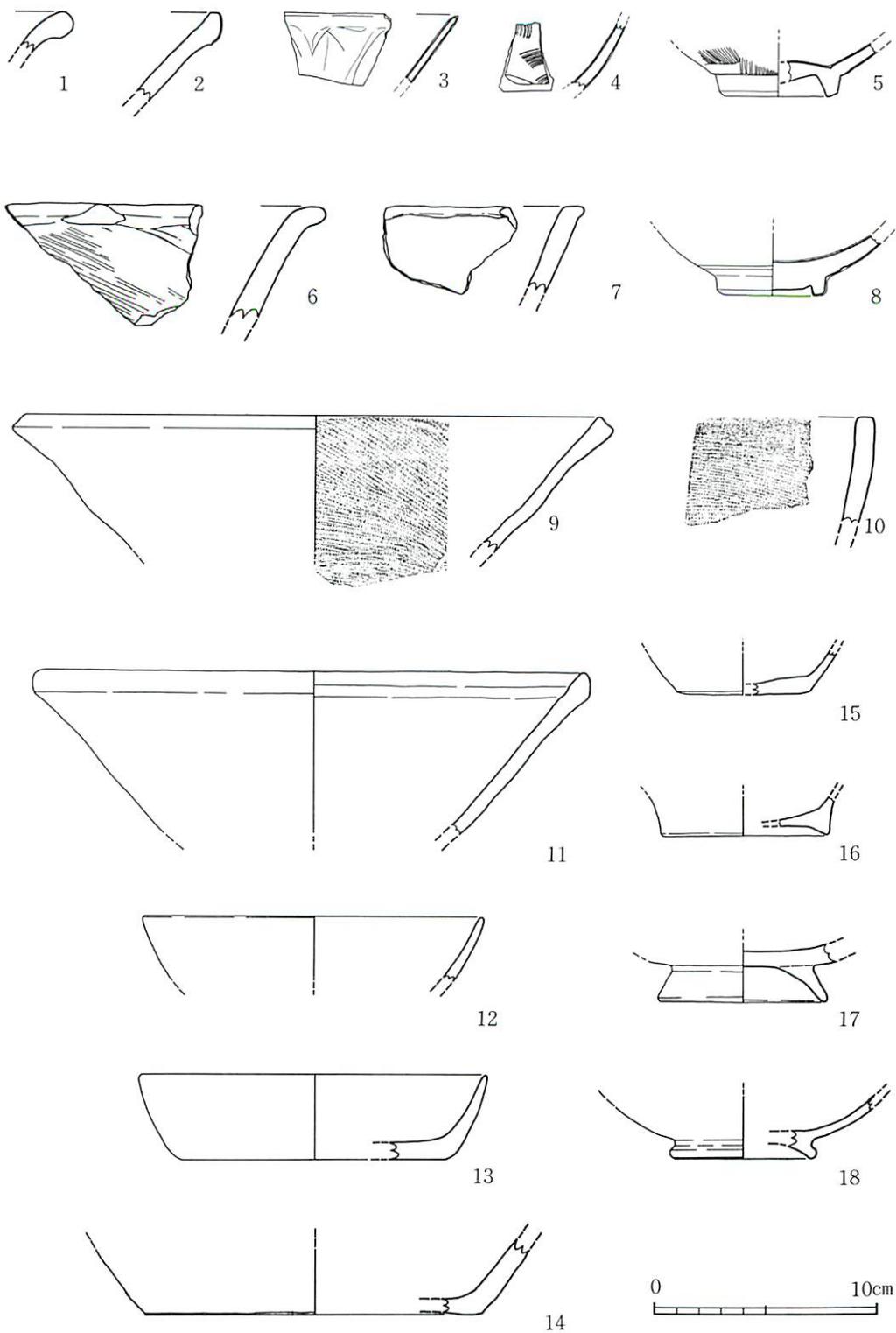
播鉢および捏鉢の2器種がある。

10は播鉢の口縁部破片である。口縁部はやや内湾ぎみで、内器面には横方向あるいは左上がりのクシ目を有する。色調は灰白色を呈しており、やや焼成があまい。11は捏鉢の胴部から口縁部にかけての破片である。片口の部分はみられない。平底で胴部から口縁部にかけて開く器形が考えられる。口縁部は断面三角形に肥厚している。内器面にはミズビキ痕が観察できるが、外器面には煤が付着しておりはっきりとしない。この煤は黒色土器の様にヘラで磨くなどして意識的に吸着させた様子も認められない。また、口縁部の外器面側だけ黒褐色に還元焼成されていることから垂直に重ね焼きされたと思われる。内器面は灰色を呈しており、焼成はややあまい。ともに13～14世紀代に比定できる。

(3) 須恵質土器

器種の推定ができるものでは、捏鉢・播鉢・坏がみられる。

2は捏鉢の口縁部破片である。片口部分はない。胴部から口縁部にかけて外傾し、断面三角形に肥厚する口縁を有している。内外器面にミズビキ痕がみられる。口縁部の外器面側のみ黒色の自然釉が付着している。また、外器面側は口縁から一段を介して胴部へつながっているが、その段の部分と口唇部が破面となっており、垂直に重ね焼きされたことが判かる。9は播鉢の胴部から口縁部にかけての破片である。ロクロ成形の後、内器面に横



第16図 出土遺物実測図(8)

1号窯 (I層: 2・3、VI層: 8・16、VII層: 4、IX層: 9・10・11・18、X層: 1・14)
 2号窯 (2層: 13、4層: 6・12、5層: 7、8層: 15、14層: 17、16層: 5)

方向あるいは左上がりのクシ目をつけてある。焼成は良好で、緑灰色を呈する。2・9は13～14世紀代に比定できようか。12は坏の口縁部破片である。やや内湾ぎみの口縁で舌状にすぼまる。器面は灰白色を呈している。15は底部破片である。形態的には小壺の底部も思わせるが、胴部の器壁が薄く、碗である可能性が強い。内外器面には成形時のミズビキ痕が観察され、ロクロ成形であることが判かる。底部に乾燥時の圧痕と考えられる幅約3mmの平行凹線が3条認められる。赤褐色を呈する。

陶磁器（第16図3～5・8・14 図版14下）

(1) 陶器

14は甕もしくは壺の底部破片である。胎土は砂質であるが、緻密で強く焼き締められている。外器面には自然釉が付着している。同様の胎土・焼成の胴部破片に灰釉のかけられたものがあり、その作りは常滑焼を思わせる。

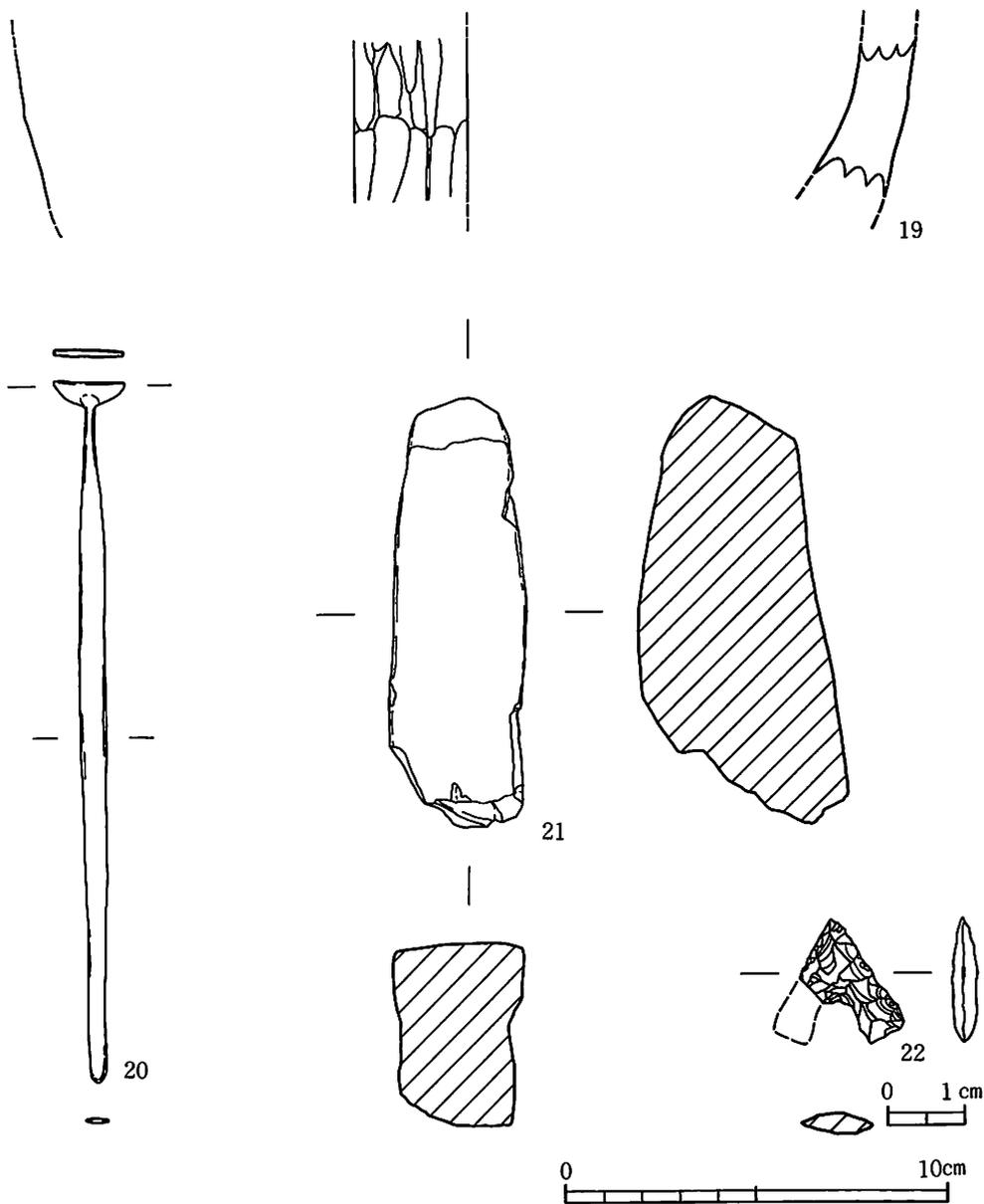
(2) 青磁

器形は碗形のみ、4点が出土している。

3は竜泉窯系の碗の口縁部破片である。ローリングを受けているが、外器面に鎬蓮弁文が片切り彫りされている。胎は明オリーブ灰色、釉は灰褐色を呈している。年代の上限は13～14世紀代以降に比定できる。4は胴部破片である。内器面に9条を1単位とするクシ描き文様が施文されている。胎は灰白色、釉は明オリーブ灰色を呈している。外器面に釉溜まりがみられる。5は底部破片である。削り出しによる高台をもつ。胴部外器面にクシ目文様が施されている。内・外器面には明オリーブ灰色の釉がかけられており、高台および高台内は露胎となっている。胎はオリーブ灰色である。内底部の形態などから見て同安窯系の碗であろう。3と同様に13～14世紀代を上限とすることができる。8は底部破片である。削り出し高台で、外器面の胴部の高台に近い部分に凹線が一条巡っている。外底部以外は全面に緑灰白色の釉をかけてある。畳付部の釉がはがされることなく残っていることから、重ね焼きされていない精製品である。

石製品（第17図19・21・22）

19は滑石製石鍋の胴部破片である。内器面は横方向に丁寧に研磨されており工具痕をほとんど残さない。外器面には縦方向の工具痕が残っている。灰色を呈し、外器面は部分的に煤で黒っぽくなっている。21は砥石である。いびつな方柱状で、3側面が使用によって磨られて平滑になっている。石材は流紋岩系であると思われる。22は黒曜石製の凹基無茎鏃である。形態的には「鋏形鏃」と呼称されるものである。片脚部を欠損しており、刃こ



第17図 出土遺物実測図(9)

1号窯 (Ⅶ層：20、Ⅸ層：22) 2号窯 (10層：19、13層：21)

ほれも僅かに認められる。

青銅製品 (第17図20 図版14下)

20は簪と考えられる。直線的でわずかに胴の張る身部に半円形の頭部がつく。厚さは2mm弱と薄く平坦である。特に欠損などは観察されず、完形品である。いつ頃の時期に比定し得るかは判然としない。

瓦以外の遺物は、1号窯ではⅨ層以上、2号窯では15層以上でそのほとんどが検出されており、同一の層から出土した遺物であってもかなりの時期幅が認められた。また、出土遺物の多くがローリングを受けて磨滅しており、このことはこれらの多くが流れ込みのものであって現位置を保ったものではないことを示している。また、遺物の所属時期については、その時期幅はおおよそ10～14世紀代と考えられる⁽⁴⁾。

註(1) 熊本県教育委員会『肥後国分僧寺跡Ⅱ』1983年

註(2) 熊本県教育委員会『肥後国分僧寺跡Ⅰ』1982年

註(3) 同上

註(4) 遺物の時期については、主に大宰府史跡における成果を参考にした。主な参考文献は以下のとおりである。

福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集(下) 1978年

横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして」『九州歴史資料館研究論集』4 1978年

熊本県教育委員会『山田城跡』1989年

菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 1989年

五、考 察

今回の調査で出土した瓦片の総数は、1・2号窯合わせて700余点である。この数は、灰原における出土数としては少なく、「三、遺構」で前述したように相当量の瓦が流失したと考えられる。出土した瓦の内訳は、ほとんどが平瓦・丸瓦によって占められており、他には軒平瓦が2種類7点、鬼瓦・鷗尾が各1点のみであった。平瓦については大きく3類に、丸瓦は2類に、それぞれ製作技法から分類を行った。また遺構の調査では、2号窯において焚口付近から灰原にかけての土層堆積状況を把握することができ、焚口部に2回の造り替えが行われ、最低3次にわたって使用されたことが判明した。ここでは出土瓦と遺構の分析を基に本窯における瓦の製作状況について考察し、3次の操業段階毎に記述することとする。なお1号窯は1966年に窯体及び焚口付近の調査が行われており、灰原と窯体との土層の対応関係が確認できないため、2号窯の分析結果と比較して考察を行う。

第1次操業段階

第1次操業時には、地山を楕円形に掘り込み、焚口部を形成している。第2次操業時の

表1 1号窯層位別瓦出土数*

層	瓦	平							瓦			軒平瓦		
		I-a	I-b	I-c	II-a	II-b	II-c	II-d	III	I-a	I-b	II	I	II
I		2	1	1		1								
II														
III		1	2	1										
IV														
V														
VI		1	1											
VII														
VIII			3											
IX		2	6	2				2	2		2			
X		18	43	3	2	2			6		2			
XI		4	3	4					1	1				
XII		4	3	4					1	1				
XIII		1	12	2						1				
XIV														
XV														

表2 2号窯層位別瓦出土数*

層	瓦	平							瓦			軒平瓦		
		I-a	I-b	I-c	II-a	II-b	II-c	II-d	III	I-a	I-b	II	I	II
1		2	2		1									
2		3	1	2		2								
3			1				1							
4		2	5			2			1	1	1			
5		8	11		2	5		4			1			
6		1	3	1		5	3	6	1		2			
7		1	1	2		1					1			
8		9	6	3		1			5	1	1	1		
9		1												
10		20	35	8	1	1		6	1	12	3	6	2	
11		5	2						2		1			
12		4				1				1				
13		1	2	2		2		1						
14		6	5			6	5	6		1		1	2	
15		2	3	1					2					
16		18	16	1					4	1			1	
17			1											
18														
19														
20									2	1				
21		1						1						
22		1												
23														
24		16	3					1	1					
25		18	8											
26		2						1	8					
27		18	7					4	1					
28												1		
29		12	2							1	3			
30		1							2	2	3			
31		9						1			1			
32								1						
33		1	1											
34		1												
35		4	1						3					
36		8	3						1	1	1		1	
37														
38			1											
39														
40		11	2					2	3	2	1			

* 瓦片は角が残るもの、及び1/4以上が残り、個体の判別ができるものを1点として数えた。

床面が28層の上面であり、これに対応する焼土の広がり34層であることより、この掘り込み内の土層（35～40層）を第1次操業段階に伴う堆積土とすることができる。この第1次操業段階に伴う平瓦としてはⅠ-a、Ⅰ-b、Ⅲ類が出土している。出土数は少ないが、凸面に縄目叩きが施され、薄手で、良く焼き締められた丁寧な作りであるものがその製作の中心となっており、板状工具によって叩き締められたものは全く存在しない。丸瓦においては、凸面に縄目叩きが施されるⅠ-a、Ⅰ-b類、及び板状叩きが施されるⅡ類がそれぞれ出土している。いずれにしても、この段階における瓦製作は、比較的小規模で単独の工人グループによって営まれていた状況が想定できる。

第2次操業段階

第2次操業時の床面は焚口付近では17・20層上面であり、これに対応する前庭部床面は25・26層上面、及びA・B-3区では整地層である23層上面であることから、第2次操業段階に伴う堆積土はA・B-3区の傾斜面まで厚く広がる土層（17～33層）とすることができる。これらの土層中から出土した瓦は、平瓦・丸瓦ともに第1次操業段階と同様の状況を示し、平瓦はⅠ-a・Ⅰ-b・Ⅲ類が、丸瓦はⅠ-a・Ⅰ-b・Ⅱ類が出土している。凸面に縄目叩きを施し、薄手で、焼成の良い平瓦が見られるという点では第1次操業段階における製作状況と変化はないが、第1次操業段階に比べ瓦の出土量が増えたこと、厚く広範囲に広がる堆積土より判断すると、生産活動の活発化あるいは操業期間の長期化が伺える。

第3次操業段階

第3次操業段階の床面は、焚口付近では17・20層上面、前庭部以下では23・25・26層上面である。従って、5～16・21・22層が第3次操業段階に伴う堆積土である。この第3次操業段階において瓦の製作状況に変化が現れる。平瓦では、前段階までの凸面に縄目叩きを施す薄手の瓦に加えて、厚手で質の悪いもの（Ⅰ-c類）が出現する。また、新たに凸面に板状叩きを施すもの（Ⅱ類）が製作され、バリエーションに幅が見られるようになる。このことから生産量増加に伴う新たな工人集団の出現の想定も可能である。

1号窯についてはX層以下が操業時の原状を保っている堆積土であり、瓦の製作状況はX層とⅡ層以下とに分けて説明することができる。

X層から出土した平瓦は大きくⅠ類とⅡ類との2つのタイプに分けることができ、Ⅲ類は見られない。さらにこれらはその厚さ、製作技術的な差として細分が可能で、その内訳はⅠ-b類が最も多く、Ⅰ-a類がこれに次ぎ、他にⅠ-c・Ⅱ-a・Ⅱ-b類が出土し

ている。丸瓦もⅠ・Ⅱ類がともに出土している。Ⅹ層の平・丸瓦のバリエーションの豊富さは2号窯の第3次操業段階の状況と類似したものと言えるが、平瓦Ⅱ－d・Ⅲ類、及び軒平瓦が出土していないという相違点も見られる。

Ⅺ層以下から出土した瓦は、総数が少ないものの、平瓦・丸瓦ともにⅠ類のみしか見られない。2号窯の第1・2次操業段階の状況と類似する可能性が高いと言えるが、丸瓦Ⅱ類が出土しておらず、Ⅰ－c類が出土するという相違点も見られる。

以上の分析から1号窯Ⅹ層は2号窯の第3次操業段階に、1号窯Ⅺ層以下は2号窯の第1～3次操業段階に、それぞれ時期的に並行する部分を持っていると考えられる。工人集団の問題については、両窯の瓦の製作状況に対応関係が見られ、1号窯ではⅨ層からの出土ではあるものの、両窯から特異な木葉の葉脈状の叩き文をもつ平瓦Ⅲ類が出土していることから、1・2号窯は同一の工人集団によって営まれていたとすることができよう。両窯の関係については、1号窯の方が、灰原の土層が薄く瓦の出土数自体もかなり少ないこと、また瓦に見られる製作技法のバリエーションもやや単純で、軒平瓦が出土しないことから、1号窯が2号窯の補助的な役割を持っており、時期的には2号窯が先行するものと考えられる。

以上、出土した瓦から1号窯、2号窯の操業状況について概観してみた。要約すれば、2号窯がまず先行して構築され、凸面に縄目叩きを施す薄手で焼きの良い瓦（平瓦Ⅰ－a・Ⅰ－b類と丸瓦各類）が小規模に生産された。生産規模の拡大に伴って1号窯での生産が開始され、その後、1号窯Ⅹ層・2号窯第3次操業段階になって瓦の出土数・製作技法のバリエーションに増加が見られることは、複数の工人集団によってさらに生産規模が拡大されたものと言える。本瓦窯址の操業期間については、肥後国分僧寺Ⅳ期に比定される2種の軒平瓦（Ⅰ類・Ⅱ類）がそれぞれ第3次操業段階、第1次操業段階において製作されたものであることから、肥後国分僧寺の改修時における瓦の供給を目的とした、比較的短期間の操業であったと考えられる。従って、肥後国分僧寺におけるⅣ期、即ち10世紀以降の年代を与えられよう。

六、まとめ

神園山瓦窯址は1966年に日本考古学協会生産技術特別委員会窯業部会によって小山煤谷寺瓦窯址とともに、肥後国分僧寺出土瓦との関連を確認するために発掘調査が行われた。調査は1号窯窯体のみに対して行われたが、出土遺物が所在不明となるなど、遺跡の内容について不明確な点を多く残していた。神園山瓦窯址は周辺で採集された木葉の葉脈状の特異な叩き目を持つ平瓦から、肥後国分僧寺に瓦を供給していたことが明確に知られる唯一の窯跡であるため、今回『新熊本市史』編纂事業の一環として再調査を行うこととした。

今回の調査は、2号窯の窯体が崩壊しかかっており危険があったため、1号窯・2号窯ともに灰原についてのみ行った。

1号窯については既に地下式無階無段登窯であることが判明している。前庭部は地山を平坦に整形し、灰原は掘り込みを持たず、急激に傾斜する自然地形をそのまま利用した構造であることが確認できた。前庭部にはピットが2基検出された。調査区内では他に検出されなかったが、覆屋的建物の柱穴である可能性が高い。出土した瓦は平・丸瓦のみ約180点と比較的少なく、その多くは自然地形に沿って流れたかたちで散布していた。

2号窯は窯の焚口部の構造について2回の造り替えを確認することができ、その結果3次にわたる使用を層的にもおさえることができた。第3次操業段階には焚口部に大型の石材を用い、焼土層を貼って整地を行う等、1号窯よりもやや丁寧な構造である。灰原の構造は1号窯と同様、自然地形をそのまま利用したものである。出土した瓦は計約520点で、総数、種類ともに1号窯より豊富である。

今回の調査で出土した瓦片の総数は700余点であり、その大部分を平・丸瓦が占め、他には軒平瓦7点、鬼瓦・鷗尾各1点が見られるのみである。平・丸瓦は製作技法からそれぞれ大きく3類、2類に、軒平瓦は瓦当文様から2類に分類できる。2類の軒平瓦はともに肥後国分僧寺に出土例があり、葉脈状文を持つ平・丸瓦と合わせて、今回改めて神園山瓦窯址で製作された瓦が肥後国分僧寺に供給されていたことが確認された。

これらの出土瓦について、2号窯を中心として遺構・層序との関係から分析を行った。2号窯第1次操業段階は、平瓦は葉脈状文を持つもの（平瓦Ⅲ類）を除けば、凸面に縄目叩きが施されるもの（平瓦Ⅰ類）のみであり、丸瓦は凸面に縄目叩きを持つもの（丸瓦Ⅰ類）と板状叩きが施されるもの（丸瓦Ⅱ類）がともに見られる。また瓦当面に有軸羽状文

を持つ軒平瓦（軒平瓦Ⅱ類、国分僧寺のNHⅧ類に相当）がこの段階に製作されている。瓦に出土数・製作技法のバリエーションとも少なく、比較的小規模な生産が行われていた。

2号窯第2次操業段階は、瓦の種類・製作技法のいずれも第1次操業段階とほぼ同じ状況を呈しているが、出土数に増加が見られ、生産規模がやや拡大したことが伺える。

2号窯第3次操業段階は、平瓦に凸面に板状叩きを施すもの（平瓦Ⅱ類）が新たに見られるようになり、製作技法のバリエーションが増す。瓦当面内区に簡略化された唐草文を持つ軒平瓦（軒平瓦Ⅰ類、国分僧寺のNHⅧ類に相当）はこの段階に製作されている。出土数がかなり増加するとともに、焼成があまく、厚手で質の悪いものが目立つようになる。前2段階に比べ、生産規模に大幅な拡大が見られる。

2号窯の各段階と1号窯を比較すると、両窯ともに葉脈状文を持つ平瓦Ⅲ類が出土しており、製作技法のバリエーションからもⅪ層以下が2号窯の第1～3次操業段階に、Ⅹ層が2号窯第3次操業段階にと両窯の瓦の製作状況に対応関係がみられ、同一の工人集団によって営まれていたものと考えられる。

本瓦窯址の操業期間・年代については、2号窯の第1・第3次操業段階からそれぞれ出土した2種の軒平瓦がともに肥後国分僧寺Ⅳ期に比定されるものであることから、肥後国分僧寺の改修時における瓦の供給を目的とした、比較的短い操業期間であり、10世紀を大きくは下らない年代が与えられる。この年代観は瓦と伴出した土器の上限が10世紀代にあることから支持される。

本瓦窯址の操業年代よりも遅れる土器、陶磁器、滑石製石鍋、青銅製品が1・2号窯いずれからも出土している。これらの遺物は何らの遺構にも伴わず、散在的な出土状態を示していたため、解釈に苦しむものであるが、中国製陶磁器・簪と思われる青銅製品の存在から見て、中世に墓として再利用された可能性も考えられよう。

最後に、本瓦窯址をめぐる問題点について述べることにする。1・2号窯から葉脈状の特異な叩き目を有する平・丸瓦、2号窯からは2種の軒平瓦という肥後国分僧寺跡出土品と共通する瓦が出土し、本窯製作瓦が国分僧寺改修時に供給されたことが確認された。ただし、改修時にしても小規模な2基の窯で必要量が賅えたとは考えられない。1966年の調査時には周辺に他に窯が存在したとされ、今回の測量・分布調査でもその可能性が高いことが確認された。本報告では2基の窯跡の調査から瓦の生産状況の分析を行ったが、この分析は本来、他の窯跡の存在及び内容も考慮に入れて行われるべきであろう。その他にも国分僧寺出土瓦との比較考察、焼成以前に段階も含めた瓦の生産過程の総合的な分析、工

人集団についての諸問題、供給先への運搬のルートと方法など、今回の調査の結果を踏まえて多くの問題が新たに提起されることとなった。